

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和三年九月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十卷 第六号（通巻三四号）

万象

B A N S Y O

九月号

2021. 9



九月の句

十棹とはあらぬ渡しや水の秋

松本たかし

水の秋は、清涼感溢れる水や水辺から感じる秋の風景である。

流れに棹を突きさしながら進んでゆく舟。描かれているのは、十棹も突かぬほどに向こう岸に着いてしまう、それほどの川幅とっているだけである。だがこの抑制的な表現こそがこの句の眼目。水の秋と照応して渡しのイメージが広がる。

棹を静かに、ゆつくりと動かしながら渡ってゆく様子が、爽やかな川辺の景色とともに目に浮かぶ。

渡しの秋が心地よく感じられる一句である

（大久保 進）

令和三年

九月号

万象

B A N S Y O

ゆたかなるこの秋

誰が何を惜しみ 何を悲しむのか

「用意」

石垣りん

万 象

令和3年9月号

主宰作品 ほととぎす 内海 良太 4

副主宰作品 花さびた 小林 愛子 5

風 音 集

江見悦子・柳澤宗正・山田春生
福島せいぎ・内藤恵子

続・万象と共に⑤ 人生如斯ものかと観じ候 内海 良太 8

同人作品

内海良太選 9

同人作品の佳句 内海 良太 33

通 し 鴨 佐藤 和子 34

ダム湖の四季 長島 操 35

俳書探訪 曾根 満 36

特別作品評 (七月号) 榎本 文代 37

同人作品評 (七月号) 林 陽子 38

飛高俳句の魅力 — 飛高隆夫『川あかり』 — 喜多尾明子 40

句集鑑賞

藤の花を愛した詩人 — 飛高隆夫『川あかり』 — 大林 彬彦 42

俳句カレンダー掲載句自註・・・・・・・・・・・・・・・・中村 千久 44

令和4年版俳人協会編「俳句カレンダー」ご案内・・・・・・・・・・ 44

同人アンケートのまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・編 集 部 45

万象ノオト「犬」・・・・・・・・久保田富士子、江口嘉郎、小坂橋泰山、奥澤よし江、北浦詩子、島野ひさ 46

万象作品

小林 愛子選・・・・・・・・・・・・・・・・ 48

万象作品の佳句・・・・・・・・・・・・・・・・小林 愛子 62

「万象俳句会」会計担当を終えて・・・・・・・・・・竹澤 竹里 64

「万象」中央句会報（六月例会に替えて通信句会）・・・・・・・・ 65

万象基金のご報告・・・・・・・・・・・・・・・・ 67

珈琲ぶれいく^⑬・・・・・・・・・・・・・・・・ 67

東西南北・・・・・・・・・・・・・・・・ 68

投句用紙・・・・・・・・・・・・・・・・ 69

ほととぎす

内 海

良

(主
宰) 太

ほととぎす師の山墓へ水提げて
田一枚香取の神に植ゑにけり
梅雨鯰一の鳥居は川の中
在五忌や橋を渡りて神谷バー
虹たてて籠の目白が水浴ぶる
明易く明けて枕辺子規の本
河童忌やワクチン効いてゐるらしく

花さびた

小林

愛子

(副主宰)

遊具漕ぐ子に陽炎のきて遊ぶ
梅雨寒の道掘り返す鉄の爪
草茂る自転車の骨呑み込んで
うつむいて螢袋に色生まる
青葡萄びつしり垂るる夜となれり
花さびた白く咲かんと黄みどりに
緑のなか片白草の白浮かぶ

風音集



朝の雷

江見悦子

(編集人)

紫の濃し荒梅雨のジャカラランダ
海明くる小綬鶏の声峠より
青空へ上り詰めたりアカンサス
朝の雷ビル街の空朦朧と
夏至の日の明るき夕べ豆腐買ふ
慰霊の日みるく世歌ふはなち髪

青 嵐

柳澤 宗正

(同人会会長)

上げ潮の川さかのぼる群海月
卯の花や小雨に沈む動物園
立葵ワクチン接種へはづむ道
環濠にめぐらす柵や青嵐
くつきりと続く足跡植田澄む
磯蟹の子らへ鉢を上げゐたる

梔子の花

山田 春生

(顧問)

退院の妻を迎へに濃あぢさる
鬼灯咲く町一番の美容院
路地奥に高張ともしさみだるる
湯加減のよき露天湯や河鹿笛
月の出て梔子の花いきいきと
螢火の二つ三つ現れ百千に

雨安居

福島 せいぎ

(顧問)

ちちははの忌日過ぎたり浮いて来い
仏弟子の京へ急ぎぬ雨安居
葉隠れに匂へり雨の泰山木
蜜こぼす夜の台湾パイナップル
街へ出て僧と知られずサングラス
時の日や時計どこかへ忘れたる

相馬祭

内藤 恵子

(顧問)

武者駒へ触れむばかりに夏の蝶
葉桜の下に稚児武者並びをり
杉を巻く藤の若葉の濃かりけり
電線の鳩に鳩寄る日の盛り
富士山を浮かべ夕焼けの葛西橋
潮入川河口をくぐるかいつぶり



人生如斯ものかと観じ候^{かくのごとき}

内 海 良 太

正岡子規展が開催されると、遠近を問わずどこへでも出掛けた。行けば新しい発見があり人間子規への理解が少しずつ深められ、次第に子規が好きになっていった。俗にいう「追っかけ」という心理かも知れない。

平成24年、横須賀美術館での「正岡子規と美術」。子規が言った「僕に絵が画けるなら俳句なんかやめてしまふ」とは新鮮な驚きだった。

平成29年、神奈川近代文学館で開かれた「正岡子規生誕百五十年 ―病牀六尺の宇宙―」では、絶筆となった幅が展示された。

〈をととひのへちまの水も取らざりき〉〈糸瓜咲て痰のつまりし仏かな〉〈痰一斗糸瓜の水もまにあはず〉。展示のガラスケースの前で涙した。この頃から少し涙もろくなっていた。

平成26年、東京都世田谷の五島美術館で新しく発見された子規書簡の展示があった。書簡は明治27年7月1日付で、子規と同じ松山出身の俳人・五百木瓢亭宛。

内容は、明治27年2月、子規は新聞「日本」の社長、陸羯南から、新聞「小日本」の創刊に編集責任をまかされ、俳句欄を新設したり大いに張り切っていた。ところが、半年後の7月、突然、経営上の理由で「小日本」の廃刊を言い渡された。子規抜き会議で廃刊が決定されたらしく、「人生如斯ものかと観じ候」と瓢亭に手紙し、ガックリと肩を落し残念がる子規の姿を想像し同情した。このとき子規28歳だった。

「小日本」仲間の身の振り方を案じ、特に挿絵担当の中村不折の今後を案じる人間子規の姿を垣間見る思いだった。

子規の書簡には、子規という人間そのものが赤裸々にあらわれていて、読んでいて感動するものが多い。「子規の書画」(二玄社刊)の著者山上次郎氏は「子規の書簡を一読し再読してゆきつつ感ずることは、全てに真情が吐露されていて、一片の虚飾虚偽がないということと、礼節に篤く有情にあふれているということである」とのべている。

同人作品



内海良太選

○は佳句に選ばれました。

札幌 松原智津子

花莫塵はアイヌ紋様チセの土間
鳶職の幅広ズボン炎天下
甲羅干す亀無用心日雷
身じろがぬ白鷺一瞬蓑毛立て
ワクチンを打ちに片陰伝ひつゝ

札幌 岡本敬子

青嵐や敗軍の塚碧血碑
尺取の何をはかれる碧血碑
初郭公聴きしか否かたづね合ふ
衣更してワクチンの肩しろじろ
羅や夜はストーブ焚きもする

札幌 濱谷和代

水音のやさしき堰や杜若
山鳩や蔓紫陽花の森深し
緑蔭の的に矢を射る女学生
○サーフィンの潜る大波乗る小波
湿原を小舟で下る遠郭公

札幌 大内和憲

防護衣をぬぎて黒南風深く吸ふ

麦秋の穂波のはたて十勝川
ワクチンの列にかしまし白扇子
鈴蘭へプラウを洗ふ水しぶき
万緑やすぐ空になる飼葉桶

札幌 紅 露 恵 子

一度には届かぬ高み初雲雀
隠れなき畑の雲雀の落ち処
朝靄の退きては寄する立夏かな
畝床を守る木立や若葉寒
郭公や朝一番のストレッチ

札幌 大内 マ キ 子

荷を曳くも担ぐもありて蟻の道
軽鴨の子の右往左往の水輪かな
ゆさゆさと背を七色に大毛虫
○漆黒の牛を沈めて夏野かな
切り株の太き年輪蟻の列

札幌 落 合 裕 子

花柄のエプロンドレス夏は来ぬ
葉桜や蝦夷白蝶の涌くごとく
アカシアの花降りしきる川伝ひ

激つ瀬や繁みにやせし青胡桃
夏至の夜の彩雲めける月の暈

札幌 中 鉢 弘 一

尺蠖の小さき一步や啄木碑
うぐひすや瀬音小さき笹原に
鈴蘭の葉裏ひと粒かたつむり
囀りの退きたる後の蟬の声
○閉店の小さき貼紙梅雨寒し

江別 佐 藤 哲

薇の採れし山道けもの道
○身のどこか母馬に触れ仔馬立つ
ま昼時子山羊もをどる遠足日
廃校舎いまは避難所山笑ふ
田植時故郷の空は黄砂降る

苫小牧 林 陽 子

木の芽雨疫病の空の洗はれし
群青の空は無限と桷咲けり
ミントの葉ミントの色の小さき蜘蛛
露刈るや大音量の古ラジオ
露の葉を鳴らす山風山の雨

秋田 小松 敏郎

銀山を巡る墓域に桐の花
今年より他家の木となる梅若葉
水鶏翔つ水面に映ゆる雲崩し
困鮎波に向かひて放ちけり
○旅に持つ母の形見の古扇子

鶴岡 阿部 月山子

鳥海山の水の湧く海鰯漁
姿見の井戸や西行桜咲く
○蔓荊^{はまごう}や浜に小舟の船大工
蔵摘む山に掘り出す石器土器
さびた咲く番楽囃子流るる里

新潟 佐藤 雄二

砂浜に海の匂ひの蓬摘む
野遊びの集合場所は六地藏
六月の雲の貼りつく守門岳
○父の日の自画像を描く皺を描く
遂に杖突く身となりぬ走り梅雨

新潟 高橋 ひろ

一日の暮れて猫呼ぶ麦の秋

食落ちて来し夫へ剥く枇杷一つ
伊弥比古やまだ艶残す杉落葉
○山法師豊かに白を重ねたる
枇杷熟れし証抛鴉の騒ぐのは
南魚沼 森山 暁湖

昨夜の雨ほどよく湿り大豆蒔く
郭公に励まされある畑仕事
○旧街道胡桃青葉の傘なせり
隆々と雲の峰たつ八海山
更衣妻軽やかな足捌き

益子 光岡 れい子

つひに見ゆなんぢやもんぢやの花まぶし
○青蔦の茶房流るるビートルズ
さくらんぼ男の子の笑窪弾けたり
青田風と改札口を通りけり
秋田藩のぞく子の瞳に未来かな

芳賀 大村 かし子

客の来ぬ玄関先に梅雨の蝶
番を待つ接種会場薄着かな
接種終り沁み沁みと切るパイナップル

故郷の古木となりぬ花石榴
斷捨離や身も輕輕と梅雨晴間

宇都宮

阿久津勝利

丸見えの臍なき腹や青蛙
夏の雲船長室の海図かな
田植どき三和土で済ます昼餉かな
渋滞を避け次々と青田道
面影の廃校跡や花は葉に

栃木

上岡佳子

薔薇園やマリアカラスもモンローも
五月晴今朝の三義山の高さかな
産土の水屋に白き蛇の衣
六月の風のうまさよ草に座し
「ワクチンは」と会へば交はせり夏椿

佐野 亀田やす子

飴玉とおにぎり二つ菖蒲見に
半夏生草池絶え間なく水輪生る
廃坑に^{足尾三奇}残る煙突夏つばめ
○錆深き製錬所跡草茂る
渡坑夫の墓の傾き姫女苑

薔薇園の真ん中時計と風見鶏

佐野

増田幸子

届けらる今朝の湿りの真竹の子
時鳥の声のしきりや墳墓の地
高き枝に庭師三人梅落す
田植どきはるか東へ熱気球
朝日子や茅の輪をひとりくぐりたる

佐野

加藤季代

万緑の木立出づれば影短か
六月の雨露座仏を清めけり
○その脚の全部に力あめんぼう
鮎釣りの腰で進める流れかな
尺蠖の迷うてをれり枝の先

佐野

鍋島広子

斎田に田植機下す飛沫かな
梅雨の蝶室の八嶋の宮巡り
三義嶺や梅雨雲に入るグライダー
七不思議伝はる寺や七変化
葉の蔭に桃の色づく晴間かな

佐野 阿部

澄

夕風に雨の匂ひや山法師
はるにれの翼果ねばるや梅雨近し
雲の峰球児の声のみな高き
芝生過ぐ蜥蜴の背の見え隠れ
梅雨の川少年杭を渡り切る

佐野 芝宮留美子

廃線の残りし鉄路若葉風
花アカシア渡坑夫の墓いくつ
梅は実に鉾山の地の無縁塔
鉾毒の山に金雀枝根付きたり
この道の奥は廃村夏蓬

佐野 島田和枝

ふる里は旧りし武者絵の旗幟
雨に散る重なり合うてえごの花
水滴々代田に水の音のなき
隧道を出れば桐咲く奥会津
文字摺草雀の弾く雨滴

佐野 茂木弘子

真つ先に斎田を植う八嶋かな

新道はひたすら青田青田中
また少し足尾の緑増えてゐし
里恋ふる坑夫の墓や実梅落つ
銅山の奥は青嶺や雲生るる

佐野 売野

緑

夏燕木の改札を掠めけり
退院やまづ馬鈴薯の花を見に
井戸端を一夜に埋む夏椿
野うさぎの跳び越す早瀬姫女苑
月のなき静寂の城趾青葉木苑

足利 大木

茂

激流の割れて二つの滝壺へ
竹林の中の明るきほととぎす
枝蛙欠けゆく月の赤かりき
○麦刈機白き埃を横へ吐き
マロニエの花こそり立つ県庁舎

土浦 澤

照枝

人声の川渡り来るあやめ草
茶工場の農婦ら揃ひ新茶汲む
泥んこの足裏浮かせてハンモック

土手に山羊放つ親子や桑いちご
立葵切れ切れにある二峰かな

所沢 森岡 恵子

さいたま 山本 右近

虹立ちて雲の端に見る彦根城
雨雲に混じる白雲栗の花
父の日や是非なく葉増やされぬ
疫神にさらはれぬやう袋掛
隣る世へ道あるごとく道をしへ

所沢 南雲 秀子

志木 中村 千久

新茶来る計報の入りし封筒も
木道の八つ橋仕立て花菖蒲
池の面にゑくぼ散らすや青時雨
路地裏の梔子籠る白き闇
夏帽のマネキンの首細かりき

入間 山口 素基

所沢 三好 かほる

ポンポンダリア咲いて二度目のワクチンを
教室の窓満開の泰山木
白あぢさゐ空の青さを弾きをり
図書館の裏掃く一人竹落葉
蜜豆のあんずの甘き小江戸かな

千葉 田中 道江

早鞆の瀬戸の潮騒春の宵
高々と咲き溢れたり花棟
手に重き角封筒や宵の春
蜘蛛の囀の仕上がりを待つ夕まぐれ
高みより鳴き交はしつつ小鳥くる

ほの暗き森ルピナスの艶冶なる
青大将しゆると消ゆる草叢へ

秩父路の峠閉ざされ山法師
堰堤へ溪流の径濃あぢさゐ
山盛りの実梅売りゐる多摩農家

みくまりの水あふれゐて花は葉に
朝曇り義光公の古兜

浮いてきて息吸ふ蛸蚪や岩畳
露草の闇深ければ白く咲く
昼は地震夕方は雷つづけさま

豊前街道の地酒屋味噌屋燕の子

ここよりは田原坂へと吹流し
今朝の窓泰山木の珠ひらく
遮断機の軋みてあがる虎が雨
初夏や乙女産毛をきらめかせ

酒々井 竹 澤 竹 里

沢瀉の三枚羽根が雨除けに
沢瀉が席卷してゐる一枚田
蜷蛄が大手を振つて田の主に
紫陽花や都電ふらふら軒の下
銭亀が賽銭箱をよぢ登る

酒々井 中 嶋 久 登

虚子とだけ彫りし墓石や緑さす
山法師町に生き生き翻る
柔らかき雨の繡線菊信楽焼
跳ねかへる雨粒の上夏燕
反芻の籠もる牛舎や行々子

佐倉 内 海 保 子

野萱草いしぶみ多き古戦場
沼わたる風やはらかし下野草
解禁の築場に大きな蛇籠かな

夏祓一言主神社へ列なして
園児らの顔がうつりて金魚玉

佐倉 大内 佐奈枝

ゆらゆらとキャベツ畑より一両車
鯨幕ユツカの花を囲みたり

きざはしの滑りやすくて苔の花

振花の太りて緩むものもあり

割烹玉川松に吹かれし蛇の衣

佐倉 三 屋 英 俊

膝ついて草取る婆や牛の声

刈草を詰めて五袋鎌日和

もてなしは安房の鮑の踊焼

ほととぎすの声降る森や子安神

螢火のさ迷ふ闇や頼政忌

佐倉 横 川 良 子

沼近き小学校に牛蛙

朽舟の水漬く沼尻男梅雨

古町の蕎麦屋戸口に額の花

路地多き城下に迷ふ梅雨の蝶

国境の定まらぬ地図梅雨の闇

四街道

奥

太雅

枝低く仕立て房州枇杷熟る
幽学の里を縦横ほととぎす
記念樹のすもも色づく幼稚園
目が合うて鼯逃げ込む夏の草
雛の糞銜へ巢を立つ四十雀

四街道

塗木

翠雲

萌え出づる銀杏若葉のうす緑
葉隠れに泰山木の花三つ
麦の秋塩味薄き若竹煮
大粒の房州枇杷を土産とす
茄子の花肥料袋に太りけり

船橋

山下

良江

くちなしの花の縁より錆びはじめ
噴水の音の向かうの子を呼べり
唸りつつ口あけ梅雨の回収車
椋鳥の来る庭につんつん振り花
目を閉ぢて喉のどふるはせ青蛙

船橋

大山

春江

今日の日を留め夕菅閉ぢにけり

○兵送りし社しづかに蟻の列

団地老ゆ高きに咲きぬ海紅豆
青梅のうぶ毛に光る昨夜の雨
サーフボード抱へ茅の輪をくぐりたる

船橋

赤堀

洋子

蜘蛛の囲を金色とする夕日かな
茅花の穂魚群のやうに向き変ふる
○窓開けて紫陽花の色なだれ入る
放棄さるる田へのびのびと蛇莓
青葡萄園は真白の袋掛け

船橋

久保村淑子

大木の色づく枇杷の小粒さよ
夕焼空鴉の白く見ゆる刻
青萱に触るれば指に残る傷
隣る田へ隣る田へ水植田風
水遣りの四葩百鉢雫して

船橋

片桐

帆一

枇杷の実のほのぼの色づくほの曇り
風入るる小窓やねずみもちの花
塵とりの置かれしままに凌霄花

しもつけ草やアパート裏の狭き空
太宰忌の夕日見ながらそばばうろ

船橋 宮本加津代

○店頭に風を揃へて扇風機
染めむらも一興にして夏のれん
一塊となり夕焼の巢に帰る
不揃の軍手干しある緑雨かな
蜘蛛の罫に何もかからず今朝は雨

柏 山本とく江

夏萩の紅を深めて雨上る
○「空」と「寂」の墓石の間落し文
雨上がり羽蟻蠢く穴真黒
万緑や天地の境際やかに
宝塔の空被ひたる今年竹

柏 内田郁代

那須岳の遅き芽吹に熊出づる
更衣駅に眩しき女子高生
沖縄忌近し礎に名を彫ると
地謡の闇に吸はるる薪能
晨朝の全き晴へ夏うぐひす

柏 古川京子

田の隅の田螺太らず夏に入る
菖蒲田の三日にかはる色具合
青葉潮巖に光と砕けたり
毛虫降る三密避くるカフエテラス
立葵けふ吾が丈を越えにけり

流山 沢辺たけし

見物の輪を成す枝垂桜かな
葉洩れ日に白蛇の鱗濡れにけり
夏つばめ風の隙間をひるがへる
谷底に浮き立つ白や山法師
湿りたる風にほつほつえご散りぬ

流山 穂苅照子

香を秘めて大山蓮華うつむきぬ
葬儀屋の軒を出入りの親燕
○重力を嘴に集めて小鰯刺
夏雲雀羽休めれば流されて
睡蓮の間の空のいつも揺れ
虎尾草の青き穂先は天を指し

浦安 田 中 幹 也

どの家も卯の花明かり紺の海
遠洋へ空ひろげたり夏燕
暮れ際の野川明るき傘雨の忌
巢立鳥常磐木の森膨らめり
花苔や積み上げられし無縁墓

東京 須 賀 允 子

怪我をして一年過ぎぬ合歡の花
大櫓の幹びつしりと苔青し
梔子の香に引き寄せらるる米寿かな
鬼百合の吾と背丈を競ふかに
○沖繩忌われは岡山空襲忌

東京 降 幡 加 代 子

窓の外簾に青草涼しげに
灯籠の前に黄菊と紅躑躅
紅薔薇とピンクの薔薇のアーチかな
窓辺りにオレンジ色の除虫菊
能楽堂前のベランダ紫蘭咲く

東京 名 和 政 代

奈良墨を伸ばし転がす床涼し

迷路めく百円シヨップ夕薄暑
薬師寺に写経納めや走り梅雨
民宿のもてなし熊の革座蒲団
青い目のお隣さんや枇杷熟るる

東京 山 本 絢 子

滝音のはげしき所石の墓
湿る音乾く音して春落葉
新築の子の家は五階夏霞
リハビリをさるる身となり春終る
五七五婆（五歳）にばなと呼ばれ夏に入る

東京 藤 田 裕 子

傘に降るかすかな重みえごの花
ぺたぺたと廊下走る子素足の子
でで虫の思はぬ迅さわが遅筆
竹皮を脱ぐ一枚のしめりかな
何事もなくて父の日小豆飯

東京 赤 松 郁 代

溪流へげんのしょうこを踏まぬよに
大楠の洞の水飲む鳥の子
桐の花浮かべし空の暮れゆけり

車前草の花や道路の割れ目より
恋多き白寿の庵主七変化

東京 下 嶽 孝 一

東京 島 野 ひ さ

ラベンダー咲く写真のせ初ライン
一本目本日注射梅雨に入る
河川敷に声をはり上げ行々子
夕立の通り抜けたるこの匂ひ
やつちや場の果てし軒先燕の子

東京 杉 浦 一 子

東京 加 賀 葉 子

子の指に鱗粉残し揚羽とど
夏至の空雲の波寄せ海となる
扇供養揃ひの拾かしこまり
夕さりの二の門に散る花槐
たなごころの窪みに採るや青山椒

燕の子そつと覗くや巢立ち前
梅雨ぐもり水草の淀の舟溜り
磨崖仏に揺るる日の斑や緑さす
遠富士や日暮れ近づく麦の秋
輝きて雲の間を梅雨の月

東京 草 間 三 香 子

東京 久 留 島 規 子

引越しの荷台からつぼ走り梅雨
幾度もをさな茅の輪を潜りけり
〇骨切りの筋目ふうはり鯉の腕
下校の子傘振りまはす梅雨晴間
朝刊の届かぬ無聊梅雨に入る

予防接種終へて安堵のかき水
開眼の御手のつな引き五月果つ
ポストより土の匂ひや梅雨兆す
一里塚櫟青葉の覆ひたり
波音の届く茅の輪をくぐりたり

東京 岡 村 純 子

桜の実こぼるる岸辺木のベンチ

薔薇咲けり疎覚えのフオークソング

一本の幹より藤の花盛り

新茶の香急に話のほぐれけり

清流の色そのままに子持ち鮎

調布 大林 彬 彦

津浪大きく草蘇生あと絶滅危惧種の草茂る

ひと風に百の音色や風鈴屋

絶版とならぬ文庫ぞ桜桃忌

浴衣きて人には告げぬ大志かな

桐咲大佐渡高千にてきて音なき水の速さかな

武蔵野 砂 地 宏 子

教へ子の厚き封筒梅雨ぐもり

山盛の皿の桜桃「子より親」

白茶けし黒服二人夏至の朝

夕暮れの雨の雫の青葡萄

雲間より雲間へ疾し梅雨の月

立川 疋 田 華 子

竹の皮宙ぶらりんに脱ぎ初めし

桑の実にやうやうなれし多摩住ひ

五月晴日の斑のゆるる咳の神

○小川には小川の中洲芹の花

木曾谷に沢瀉の花さびしさよ

青胡桃渡しし場跡に石の舟

町田 吉 中 愛 子

あぢさゐに始まる雨の華やげり

梅だけはほつておけぬと梅拾ふ

シャガールの帽子ひらひらクローバー

帰り着き水を一気に螢狩

神木を叩いて頼む青時雨

町田 広 瀬 俊 雄

畦道に足をとられて螢狩

○点滅のシンクロナイズ螢とぶ

頭上より声の激しき枝蛙

二声三声雲に近づく不如帰

雲割れてあまねく明し夏至の月

町田 桔 梗 純

夏木立剪られてあらは屋敷神

八重葎時にとびたつ蝶の影

翡翠の橋潜りゆくひかりかな

裸足の子野川に頭寄せ合へり

黒南風に古き蜂の巣飛ばさるる

日野 喜多尾明子

ここよりはひとりの下校葱坊主
夏霞富士山のあたりへ手を合はす
人知れず梅の実太る夜の雨
新しき鉛筆匂ふ松の芯
目覚めゐて遠ほととぎすの親しきよ

横浜 榎本文代

トーストのシナモン香る五月かな
重さうな雲動き出す栗の花
○店閉づる貼紙の上燕の巣
坂上のバス停茅花流しかな
酒足して魚煮返す梅雨入かな
沖縄忌ワクチン接種の列にゐる

横浜 西本才子

産土神背にし翁の田植かな
文学館大緑蔭につつまるる
野菜売る裏に玉解く芭蕉かな
桜の実掌をむらさきに挽ぎにけり
山滴る小道をのぼり奥の院

横浜 川越昭子

海風や崖一面の黄水仙
母の日や母は今でも居る思ひ
御仏の眉美しき夏始め
一番に娘の電話来し梅雨入かな
診察を待つ間の長し釣忍

横浜 大橋雅子

弁天に黄なる落梅並べられ
故郷の墓苑を囲む花とべら
忍冬の花や友との別れの日
花柄の軽き傘買ふ梅雨曇
花石榴道行く人にほろと落つ

横浜 山崎郁子

夕焼の水田を染めぬ散居村
ラジオ流し田植手直し砺波平野
さくらんぼ散居の庭に熟れゐたり
燕飛び来棒で払ひし果物屋
燕の子客くれば覗き貸本屋
ゆすらの実摘まみ話の弾みたり

横浜 田賀棟惠

黒松の幹のごつごつ梅雨に入る
海兵の基地でありしや海紅豆
つくばひの筧に光る螢かな
誰も居ぬ献血ルーム緋のカンナ

川崎 山口千代子

富士よりの水たうたうと夏の川
水底の雲と遊ぶや水すまし
受診後の安けさしばし緑蔭に
自肅中せめて水打つ玄関に
○真つ赤なる雷除けの江戸風鈴

川崎 新妻奎子

波枕沖に小さく烏賊釣火
○藝静けさ纏ひ控へをり
時鳥そろそろ日付変はる頃
じーと鳴る螢光灯や火取虫
草騒ぐ蝮注意の立看板

川崎 大久保進

反物の彩り涼し青畳
風薫る犬の眉毛の二三本
夜店果て区割りの跡のガムテープ

日をこぼし窓に凭るる葎簀かな
父の日や天地無用の包み解く

鎌倉 恒川清爾

麦の秋書棚に古き歎異抄
デスマスク一際白し桜桃忌
泥顔に鋭き目許田植笠
紫陽花は青きがよろし谷戸の寺
藝吾も愚鈍と言はれたる

横須賀 織田みさゑ

初夏の昏れても青き谷戸の空
余生にも明日の望みや螢の夜
人生に秘策など無し汗拭ふ
○梅雨入りや日が射してゐる山の際
○三密といふ幸せの燕の子

茅ヶ崎 三澤治子

九十にして赤が好き薔薇が好き
つくばひの程よく湿り苔茂る
麦星や汐の香つよき駅を出て
若葉風静かな昼の牛舎かな
キャンパスに声戻り来ず花は葉に

伊勢原 佐藤 和子

○栗の花雨降山に雨一と日
合歡の木に喉まで見せて行々子
大山の肩の広さや夏燕
籠る日々カサブランカは夜開く
夏至の暮夫の歩幅に追ひ着けず
夏掛の上に両足投げ出して

秦野 佐藤 嘉洋

風薫る夕暮歌碑のかすり筆
ほとぼしる水車の懸樋かたつむり
夜の更けて螢水源近く寄る
強力の顔の日焼けや大背負子
開山は相模の生まれ冷奴

松本 中條 日子

雨粒を含む八分の蓮の花
日永かなちやぼと同居の軍鶏眠る
あすなろに押しかぶさりし雲の峰
しやぼん玉無となる空の青さかな
新しき樹上の小屋に三尺寝

富士 神田 美穂子

あぢさみや団地の家並なべて古り
駄菓子屋の埃まみれの浮いて来い
表彰状掲げ商ふ新茶かな
苔青む昔庄屋の兜屋根
てらてらと真金びかりの山の蟻

静岡 大村 峰子

纏れつつ雲に溶けたり梅雨の蝶
亡き夫の声かと真夜を墓
雨近し赤しようびんの声頻り
尺取のオームの記号画きては
蛇の衣去年も此処で遭うたよな

静岡 海野 みち子

雨つるの開き切つたるぼうたんに
ぺしやんこの干物のごとし青大将
葉の裏にころろころころ雨蛙
○母の日に母の作りし莫蔭を背に
ズボンの丈一寸縮め更衣

静岡 宮崎 知恵美

青空や薔薇の香りの風浴びて

鉈をもて蝸蝸に止め刺す
紅の濃き芍薬昨夜の雨とどめ
九時をさす薄紅の時計草
墓の声闇に包まれ村はづれ

静岡 長 島

操

蓬摘む縄文土器の出でし野に
新緑の盛り上がりたる櫟かな
風通す姉の形見の春袷
葉桜の風のささやき俳句塚
廃校の鳥小屋覆ふ藤の花

静岡 岩 崎

武 士

雷鳴やダム湖静かに水湛へ
吊橋の底より不意に夏燕
湯治宿上がり框の円座かな
慈悲心鳥武田の裔の村五軒
○代掻きの仕上げはぢぢの机かな

静岡 望 月

敏 男

憲法記念日防空壕の梁の錆ぶ
○炎天や重たき象の影の濃き
竹の子を寺領の藪にひとならべ

熊除けの鈴吊る駅舎雲の峯
梅雨雲や暗き海掻く浚渫船

静岡 曾 根

満

卯の花腐し峠越えなるダムの村
梅干すや全き峡の日のなかに
対岸の嶺雷鳴に浮かびたり
筒鳥やこれより甲斐へ下りたる
二十里来上がり框に新茶汲む

静岡 藤 原 千 代 子

くりくりと爺似の瞳武具飾る
ウエストを絞る体操更衣
水無月や硝子の器触るる音
推敲は湯船に浸り梅雨の月
○十本の早苗の育つ米屋かな

静岡 荻 野 加 壽 子

水匂ふ夕暮れ蜻蛉生まれけり
網戸より朦朧体の昼の月
蟻の荷に軽き重きのありにけり
脇役に徹する白さ夏大根
○夜濯のものの一つに布マスク

静岡 小川 明 美

城山の竹爆ずる音薄暑かな
倒木のがらんどより紋白蝶
茅葺きの茅を伝ふる驟雨かな
遺跡野の畔青みたり靴の跡
薫風や土偶の腹に穴ひとつ

静岡 藤本 節子

すぐ降りる遮断機の棹立葵
捕虫網石室の前素通りす
森青蛙泡に塗れて生まれけり
傾ぎたる軍曹之碑や薄暑光
バク転のヒップホップや青嵐

静岡 大長 文 昭

梶棒をがつと日焼の車夫の腕
大方は毒を秘めをり梅雨きのこ
亀の子の手足たよりなき潜り
裸婦像へ斜に構へたる麦稈帽
木洩れ日の届く木斛落葉かな

静岡 加山 ひさ子

こはれずに屋根を越えたるしやぼん玉

妹の作る瓜揉み母の味

犬の目に天道虫の映りたり
向き向きのそこが正面アマリス
隣家の外語つつぬけ心太

静岡 石川 裕子

河渡る夜汽車の音や桜桃忌
蚕豆や親指使ふこと多し
空家増ゆ泰山木の花の錆
集金や戸毎に日傘畳みては
夫を待つレースのカーテン洗ひ上げ

富山 若島 久 清

伽羅蒔と煮てほくほくの干し鰯
○麦刈つて盆地一日埃めく
あぢさゐに^{月蝕ついに観ず}夜雲がつひに雨こぼす
発電の音おだやかや山若葉
立山の影が青田に被さり来

射水 成瀬 真紀子

校庭の茂みに子熊撃たれけり
菖蒲湯や旧暦を守る加賀の人
五箇山や梁より落つる大百足虫

地ビールの職人も来て麦を刈る
ほととぎす谷にはかに風起こる

金沢 岸川素粒子

黒雲の底飛ぶ燕三鬼の忌

○無言てふ力の泉壬生狂言

○蝌蚪の陣我が青春にデモの日々

○行く春や人牛俱忘の十牛図

春惜しむ旅の終りの鈍行車

昭和の日書肆減り止まぬ文化都市

金沢 田村愛子

○アカシアの花や海向く靖の碑

麦刈りに子も帰り来てコンバイン

万緑や巴葵の塚めぐり

鯉の上亀が泳げり桜桃忌

千代尼塚螢袋の咲き初むる

金沢 井村和子

茜さす雲居の空へ巢立鳥

○愛誦の純子の一句地に牡丹

睡蓮の花が三つ四つご命日

家籠りするも一人や走馬灯

五箇山の逆さ合掌田水澄む

金沢 中條睦子

満月を過ぎ菩提樹の花にほふ

うしろ姿先住に似て白緋

○夏至の戸を少し開きて生薬屋

僧身罷りその夜遠くにほととぎす

弔ひごとありて三日や髪洗ふ

金沢 今越みち子

赤と黄にテラス明るき仏桑花

ちよつとでも触るれば薫るラベンダー

ばらの鉢軒へ入れてと電話来る

子の揚ぐるフライの音や額の花

梅雨寒やインド土産の紅茶入れ

金沢 伊川玉子

麦の秋夕日は海に近くなり

七夕の笹に秘めごと墨香る

もろこしの花や猿除け網を張り

アマリリス二つ目の咲く母の庭

揚羽飛ぶ山の水引く密教寺

金沢 伊藤美音子

寺と寺つなぐ板道今年竹
麦秋やがらんだうなる羊小屋
万緑や鳥語こもごも氣多の杜
青笹の匂ふ越後のよもぎ団子
郭公や入らずの杜の明けむとす

金沢 高田たみ子

薔薇園の順路をすすむ車椅子
草餅に黄粉たつぷり山育ち
痛む足さすりさすりて明易し
緑蔭の地べたに集ふ下校生
鮎釣のやけに大きな腰の籠

金沢 豊田高子

羽蟻の夜てらてら湿る通し土間
羽抜鶏日がな神苑くくくくと
蟻の列反戦句碑を取り囲み
ひさかたの雲居の滝の筈かな
コロナ禍の孤独の吐息枇杷を剥く

金沢 松井佐枝子

比咩の宮黒衣そろりと御贄譚

みそぎ場を遠白山の百年水
崖下りるきざはしに聞く不如帰
滝しぶき浴ぶ大岩に立ちすくむ
蝸牛うしろに引かぬ強さかな
金沢 石川純子

亀石の甲羅の黒し新樹光
急階段一步一步の滝見かな
うすうすと立山はるか植田かな
庄川へ裾ひく山の緑濃し
庄川の鮎の天ぶらほろ苦し
金沢 河野尚子

朝日浴ぶ植田に逆さ合掌家
手漕ぎ舟蹴りだす潟辺花菖蒲
四百年の椎に大洞兵器庫跡
裏口の網戸を替へて風新し
鳩除けと駅舎に放つ夏の鷹
内灘 塩井志津

○風青し越の古刹の鋸しじろ葺
咲き盛る芍薬散らし雨意の風

砂畑の辣蕒漬くる何でも屋
熊出づと町内放送若葉寒

七尾 谷 渡 末 枝

Yの字の棒切蝮を生け捕りに
竹落葉しやらしやらと掃く竹帚
井戸跡や青大将の身じろがず
○箴重し梅雨の走りの木綿機
夏至の日の紺の極まる日本海

敦賀 石田 野 武 男

○白玉を領つ芝居の生者死者
つばめ魚億の男浪を蹴つてとぶ
魔のひそむ海へ沈みて鮑海女
波二つぶつかるところ荒布刈る
藻刈舟魔除け人形吊りにけり
二の腕へとびのる地鶏光秀忌

敦賀 倉 谷 紫 龍

祭山車荒男ばかりが担ぎけり
慈悲深き露座の大仏薄暑光
水無月や飛鳥の深田罅入る
掛花の花鳥の気品夏点前

重文の古民家を守り夏炉たく

敦賀 倉 谷 ます 美

木洩れ日や水曼陀羅の水芭蕉
醬油蔵ぎつしり並ぶ棕櫚の花
天狗党のがれし陣屋花胡桃
新緑や曾良文学碑水洗ひ
お点前や萩焼かろき夏茶碗

敦賀 鶴 田 勝 子

掟札立てし社の清和かな
姿見に丸き背伸ばす更衣
石庭に砂紋のうねり走り梅雨
花籠に野の花あふれ夏点前
舟小屋に燐光せまる夜光虫

大阪 入 山 繁 幸

薰風やベビーカーより足二本
麦の秋丘の教会よりカリオン
ポルドーとシヨパン三昧梅雨ひと日
笑む母と父もぬし夢明易し
忽ちに葉を打つ音や夕立来る

徳島 福島 吉美

緑蔭に厚焼卵並べ売る
御先祖は薬学博士石榴咲く
葭簀古る厨に捌く川魚
○夏遍路商店街にタオル買ふ
めだか飼ふ寺骨董の手水鉢

徳島 村上 和義

縛られしままの恋文桜桃忌
でで虫の思はぬ速さ竹登る
オペラ座の金の装飾パリー祭
片影に傘を畳みて黙禱す
河鹿鳴くかなしき通夜の帰り道

徳島 宮西 修一

紫陽花の散ることもなく刈られけり
枇杷の実の熟れて生家の恋しかり
梅雨晴れや縁の下より猫の顔
父在りし日の盆栽と花莫蔭と
甚平を着て年金を待つ暮し

徳島 平岡 功

木洩れ日の地にくつきりと夏来る

十薬の花と香の満つ生家跡
花莫蔭にぽつんと残る遊山箱
梨畑祖父母も出でて袋掛け
麦飯は今やぜいたく馳走とも

室戸 安岡 みさき

五月雨や水切瓦の土佐の家
海に沿ふ園芸ハウス夏遍路
猿の檻ジャングルジムへハンモック
首を振る大扇風機干物売
石となる地蔵へ参る蟻の列

高知 仙頭 宗峰

○万緑に淵も染まるや仁淀川
吾が生きし証の句碑や蝸牛
薄暑光島に一つの古ポスト
崩れては又盛り上がる雲の峰
蹇の我を驟雨の襲ひくる

長崎 丸本 祥夫

螢火の指の間よりもれにけり
編笠に肩掛け三味線葉売り
しつとりと蘇鉄の若葉巻きほぐし

薩州の皮ごと食す神バナナ
金柑の花を散らして蜜吸へり

那 那 前田貴美子

母と暮らしはじめた路地の仏桑花
いきいきと路地風桑の実が熟れて
窯冷えや伊集の落花はぬれやすく
陶工の簾籠りや峡の風

○浜木綿や湊名残りの野面積

那 大 湾 宗 弘

経糸へ杼を走らする白雨かな
海あをく舟虫いつも逃ぐる虫
玉虫の虹色松の高みから
雨来ると浪立つ摩文仁島忌日
ひろびろといづれは裂くる青芭蕉

那 比 嘉 半 升

仕立屋の缺すべらす薄暑かな
小流れの淀みにふゆるあめんぼう
黒南風や手掘りの浅き避難壕
にぎやかに夕日落ちゆく花ゆうな
遠き日のさざ波のごと夜光虫

那 當 間 シ ズ

走水や苔の香炉に夏落葉
初蟬に調律のあり後唱和
村相撲の土俵そそけし大緑蔭
欠氷女三人の姦しと
路地涼し隣人集ふ月の蝕

那 中 本 清

復帰の日泥亀ごろと音立てて
三線の音や沢藤の木下闇
芒種南風香炉の灰のほの湿り
芒種荒潮入川へ潮太く
日の斑降る土帝君の青蜥蜴

那 謝 花 寛 菅

牧師てふたづきや今日の虹仰ぐ
父の日をひとりで済ます缶ビール
ヨブ記読む梅雨夕焼の直中に
弥撒終へて闇夜に探す星涼し
枕辺の聖書へ届く梅雨の雷
月桃の花に寄せある耕運機

宜野湾 吳 屋 菜 々

花伊集に海渡り来し風届く
休め田の足跡に蟻かたまれり
アガパンサス咲かせ茶園の主かな
すててこも外に出で月の欠け始む

西原 宮城

つくよみの透きなき隠り月涼し
橋台に家捨てし人梅雨の蝶
船虫の火の粉さながら散りにけり
六月や遺影の母の遺品なく
刻銘の二十余万の梅雨の黙

謹告

谷田部 栄氏（創刊同人・東京）は、令和
三年七月十四日、逝去されました。
享年九十三。

謹んでご冥福を祈ります。

万象俳句会

勉

俳句

9月号
予告

8月25日発売

予価950円(本体864円)◎

特別作品 小澤實・岩淵喜代子・中原道夫

モノに託す極意

大特集

▼総論「物」から詩が生まれるとき…… 広渡敬雄
▼実作編① 物の選択・描写・展開…… 山崎十生／
渡辺誠一郎／中西夕紀／高室有子
▼実作編② 添削！「物」に託せば句は見違える
▼座談会 物に語らせた名句とその鑑賞
固有名詞／自然物／生活全般

特集

マンネリからの脱却

季語／発想／描写／型／語彙／自己模倣

句集特集

若井新一『風雪』

連載

名句水先案内…… 小川軽舟／
現代俳句時評…… 西村麒麟／ほか

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

雑学鳥獣植物戯詩

全24回

八木 幹夫

第8回【秋篠寺の萩—幻の写真—】

真夜中に目が覚めた。男三人で旅に出た。(今から五四年も前のことだ。)目的地は奈良京都方面。受験勉強の束縛から解放されユースホステルや野宿で寝泊りし、十日間ほどのアバウトな貧乏旅。二人の友人は早稲田、東大に落ち着く。私たちの年齢は19歳か20歳。旅の後半の目的地は秋篠寺。八月末の蟬時雨、門を抜けた途端その佇まいに馬鹿話が止んだ。本堂の右手に萩の薄紫が揺れる。堂内の闇に目が慣れ伎芸天がぬつと立つ。外の暑さもあつてしばし堂内で涼む。見学者はほとんどない。そのお顔の柔和な慈愛にいつのまにか包まれていることに気付く。豊かな時が流れた。

外に出ると或る人と出会った。付添カメラマンが数学雑誌の表紙に使うので写真を撮らせてほしいという。まばらに咲いた萩の前で誰か判らない先生とパシャパシャ。「戦後の日本は昔のものを捨て去ったが、君達のような若い学生が東洋的な情緒に関心を持つのは嬉しいことだ。」その後、理系の友人の調べで数学者の岡潔氏と判明。古典や仏像から学ぶことは尽きない。さて、岡先生、半世紀前の幻の写真は今いずこ。

公益社団法人 俳人協会

俳句の回路、短歌の回路

対談 井上弘美×川野里子

巻頭作品10句

安立公彦・塩野谷 仁・すずき巴里
津川絵理子・対馬康子・西村麒麟
村上喜代子・矢島渚男

俳壇

9月号

8月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
田中亜美

八木 健 選 滑稽俳壇

特別作品30句……神野紗希

新連載

難解俳句を齧る……栗林 浩
小説・遙かなるマルキーズ諸島……マブソ青眼

連載

ものがたりのある俳句……青木亮人
いきもの歳時記……角谷昌子
俳句史を見直す……秋尾 敏

俳句と随想12か月

菅野孝夫・柴田多鶴子

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

同人作品の佳句

内海良太

閉店の小さき貼紙梅雨寒し 中鉢弘一

コロナ禍による不景気、倒産、閉店は全国的な社会現象となつてしまった。都心のビル地下街も貼紙がやたらに目に付く寂しい風景である。貼紙の端が捲れてでもしていれば尚更、梅雨寒しである。

漆黒の牛を沈めて夏野かな 大内マキ子

貫禄ある重量級の黒牛が放牧されている。緑の世界に漆黒の牛は存在感がある。牧草の成長の旺盛なこの時期、牛飼も牛と共に夏野に沈むハッピーな時間帯である。

店頭に風を揃へて扇風機 宮本加津代

店頭で普段よく見かける景。いろいろな新型の扇風機が向き向きに涼風を放っている。この句の場合、風の方角を一つに揃えているというのが発見。見慣れた平凡な景の中にも、よく見ていると新しい発見がまだまだある。

重力を嘴に集めて小鰐刺 穂刈照子

獲物を見つけ猛スピードで急降下する小鰐刺に、いつも眼を見張る。身を細くしていかに嘴に重力を集めているようだ。この句もよく観察し、感じて作っている。短い俳句形式では、このような暗喩で句が生き生きとする。

小川には小川の中洲芹の花 疋田華子

中洲という利根川や石狩川、淀川などの大河がすぐ眼に浮かぶが、そういう固定観念ではいけないらしい。小川にだって、よく見れば中洲があると教えてくれた。それも咲いているのは葦の花や浜茄子の花ではない、清楚な芹の花が小川の中洲らしくていい。季語が句の中によく働いている。

真つ赤なる雷除けの江戸風鈴 山口千代子

東京・浅草寺の四万六千日には鬼灯市が立つ、ほおずきの籠に風鈴が吊りあつて、いかにも涼しげである。この日は、雷除けの守り札も売られているが、売り子が鬼灯籠を「雷除けの風鈴だよ」と声を張り上げて売っているのだらう。真つ赤な風鈴に存在感があり、即物具象という感じがする。

母の日に母の作りし莫塵を背に 海野みち子

母の日は何々のプレゼントばかりではない。こういう母の日の素敵な感謝の仕方もある。母親が自分で莫塵を編んで作った着莫塵を遺してくれた。その素朴な着莫塵を着て亡き母親に感謝しつつ畑仕事をする。いい母の日となった。

無言でふ力の泉壬生 狂言 岸川素粒子

四月末、京都壬生寺の念仏法要期間中に、「壬生大念仏狂言」が演じられる。狂言は一切セリフを用いない無言劇。仏の教えをパントマイムで演じ、遠くの観客にも解りやすく示すというもの。句の「無言」という「無」の力の奥深さを思い知る。同時発表の〈行く春や人牛俱忘の十牛図〉も遠くで「無」の力と繋がっているのかも知れない。

通し鴨 佐藤和子

沙羅の木に八十八夜の通り雨
 画眉鳥の声のしきりやみどりの日
 山藤の落花水面をむらさきに
 青白く垂るる卵の花ぬたば道
 朴咲くや探鳥小屋のがらんど
 子燕のこぞりて飛べる薄暑かな
 隠沼に白き花降る通し鴨
 青梅のたわわ三年留守の家
 夕闇へ一と声のこしほととぎす
 蜻蛉生れ木道に翹休めをり



新聞もテレビも、連日ト
 ップニュースはコロナのこ
 と。ワクチン接種は始まっ
 たが、まだ／＼予断を許さ
 ない。スーパーの買物以外
 は人混みを避け、家の周り
 や田んぼ道を歩いて句材を
 ひろっている。

時には車で二十分程の丹
 沢の麓の自然観察園まで足
 を延ばすことも。木道をゆ
 っくり巡って行くと、野鳥
 の囀りが新緑の雑木林から
 聞こえてくる。

猪のぬた場にはどきりと
 するが、それも観察園の魅
 力の一つである。

ダム湖の四季

長島

操

淑気かな湖心へ波の光りつつ
滑り出す渡船の水脈に初日影
木の芽張る山に向ひて渡し出づ
湖隔て銃声響く名残獵
鳶舞へり茶摘み始まるダムの村
渡し待つリュック取り取り夏休み
満月を湖に浮かべて村閑か
瑠璃色の湖の細波十三夜
立冬やダム湖を渡る大鴉
がうがうと風走る湖面かな



井川ダムは昭和三十三年に完成した。

それまでは大井川に架かる吊橋が唯一対岸へ行く手立であった。

ダム完成により、吊橋の代償として、渡し船が航行することになる。

ダム工事に伴い、道路は拡張され、峠越えの林道も整備された。

近年、渡船は観光客の利用が増えるにつれ、乗船者の持て成しに、茶菓の接待、神楽の笛太鼓の演奏、フルート、大正琴の合奏などに楽しませてくれる。

俳書探訪

曾根 満

月刊「俳句」六月号を読んで

大特集「推敲の現場」に注目しました。副題は「何を、なぜ、どう直すか」です。内容構成と筆者は、左の通りです。

総論 推敲では何が行われているのか 朝妻 力
私の「推敲の現場」

武藤紀子 秋尾 敏 今井肖子 津高里永子
河原地英武 峯尾文世 今瀬一博 大西 朋
名匠の推敲を見る(一)内は筆者

中村草田男(横澤放川) 石田波郷(山根真矢)
金子兜太(柳生正名)

総論では、芭蕉と虚子を挙げています。(虚子は割愛)

初案 山寺や石にしみつゝ蟬の声(曾良「俳諧書留」)

次案 さびしさや岩にしみ込む蟬の声(「初蟬・泊船集」)

成案 閑かさや岩にしみ入る蟬の声(「奥の細道」)

この推敲のポイントは、しみつゝしみ込むしみ入るに
みる強い動詞から、(閑かさ)にふさわしい動詞(しみ入る)に
推敲し、それが結果的に感動の核心に迫ったとの評価です。

私の「推敲の現場」より今瀬一博氏(「対岸」)「沖」昭和40
年生)の「季語の理解と感動の所在」を紹介します。

成案 黄砂降る一千キロも誤差のうち 一博

原句 黄砂来る一千キロも誤差のうち

初案① 千キロを超える誤差なり黄砂降る
初案② 千キロは誤差のうちなり黄砂降る
初案③ 黄砂来る誤差は一千キロメートル
初案④ 黄砂来る誤差は一千キロ以上
初案⑤ 黄砂来る一千キロを誤差として

今瀬氏は、右の初案③④⑤を持ち句会場へ。電車の一時間
の中で、③は「数字」が自己主張すぎて、黄砂の景が浮かば
ず、④は「以上」が実感に乏しい、理屈でもある。また、こ
の二句共に、助詞の「は」が説明的で違和感が、⑤の形は悪
くはなかったが、文末の言い切りの弱さに迷いがあつた。な
どを思案しながら句会場の門をくぐったとき「黄砂来る一千
キロも誤差のうち」が、ふっと浮かびそれを投句したとのこ
と。しかし、句集出版の際は、「黄砂来る」の擬人化が、作為
的なので、眼前描写の「黄砂降る」に推敲した由。

今瀬氏は「推敲には技術も必要だが、その前に季語に対す
る深い理解が必要と思う。歳時記は例句を含めてよく読むべ
きだろう」と結語しています。

名匠の推敲を見るでは、中村草田男氏の「秋の洋の一大紺
圓板の中」から「秋の航一大紺圓盤の中」への推敲。石田波
郷氏の推敲の四つのポイント「具体的な表現を心掛ける」「物
語を紡ぐ」「読者の共感を得られるか考える」「声に出して読
む」。金子兜太氏では、「しなやかな自分」を前提としてこそ
推敲が成り立つ、など推敲の要諦が述べられています。

鳥の恋 藤原千代子

茶畑と田圃の残る自然豊かな故郷が、作者独自の視点で丁寧写真生されている。

鳥の恋くるりくるりと繰り返し

公園や広場などに集まってくる鳩。その中にくるくるとまわっている一羽を見ることがある。求愛なのだという。「くるりくるり」に鳥のひたむきな姿が見えてくる。

乳母車桜吹雪へ押し出せり

あたたかな陽気に誘われるように乳母車を押して散歩に出かけた。一陣の風に散り始めた桜の花びらを浴びて、作者はしばし立ち尽くしてしまったのだろう。「押し出せり」の強い調子が、作者の心情をいろいろと想像させる。情景は違いが、橋本多佳子の「乳母車夏の怒濤によこむきに」の句を思った。

茶摘女の声降りて来る村の墓

茶摘みは四月中旬頃から始まるという。山の強い日差しの中で黙々と茶の芽を摘み続ける作業となる。茶山に抱かれるようにある墓地。賑やかな声が聞こえてくると、一日の作業の終りである。穏やかな村の暮らしを思う。

如露を手にとり遺伝子語る桜守

如露(如雨露)と遺伝子、二つのものを並べて桜守の姿が詠まれた。桜に多くの変種があるのは、遺伝子の組み換えで生まれたから。如雨露が新しい品種の苗木を育てていることを想像させる。現代の桜守のありようが描かれた。

花吹雪 宮本加津代

地元の「ふなばしアンデルセン公園」を吟行された作品。作者も子供の心に戻って楽しめたようである。

花吹雪あびてアンデルセンの像

アンデルセンはデンマークの童話作家。「マッチ売りの少女」「みにくいアヒルの子」など多くの作品を残し、今も読みがれている。桜吹雪の景を詠んで句は簡潔であるが、作品の題名となった句としては何かもの足りない。

手庇や菜の花畑匂ひたる

一面を黄色で塗りつぶしたような菜の花畑。春の日に眩いばかりである。手で日差しを遮ると菜の花の匂いがしてきたという。「手庇や」が効果的に働いて、一句の中に色彩と匂いが詠み込まれた。

咲き満てる桜の中をミニ電車

桜の下をゆつくりと走るミニ電車。線路の響きが懐かしい。

寝転ぶ子駆けだす子等や草若葉

広い原っぱに寝転んだり、駆けまわったり、子供たちの元気で弾んだ声が聞こえてきそうである。季語の「草若葉」は「若草」より時間を経て若葉の姿が見える草のことである。「思いっきり遊んで大きくなあれ」という思いも感じる。

凜として歩く背中や春シヨール

背筋をぴんと伸ばして歩いているのは年配の女性か。後ろ姿が印象的である。春シヨールがやさしく彩りを添えている。

同人作品評（七月号）

林 陽 子

河川敷湿る草より初雲雀 松原智津子

「雲雀」は地上の草の間に、枯草や根で皿形の巢を作る。春の繁殖期は特に高い声で鳴き、空中高くのぼり急降下する姿が親しまれている。鶯と共に春の代表的な鳥である。

一日一万歩のウォーキングが日課だという松原さんは、何時も若々しく、元気でいらつしやる。

少し暖かくなってきたので、豊平川の河川敷まで足を伸ばしてみた。湿りの残る草原に、鳴きながら春の空へ真つ直ぐ舞い上がる雲雀を見つけ「初雲雀だわ、今日は何と楽しい」と。平明に丁寧に写生されていることで、読み手も幸せな時間を共有できる句となった。

稲畑汀子の〈雲雀野へ何時か伸ばしてゐる散歩〉もある。

神の鯉散り込む花を吞みゐたり 鍋島 広子

「花」といえば桜の花をさす。桜は特に散り際が潔く美しいといわれるが、見事な花吹雪が舞い散る神の池を眺めていると、鯉がパクリと花びらを飲み込む瞬間を目にした。

吸い込まれるような青空、満開の桜、池一面に広がる花びら、

「神の鯉」の大きくあけた口元へと焦点を絞り、偶然の発見を見逃さず表現した。正にシャッターチャンスの句。

耕しの土黒々と雨を吸ふ 澤 照枝

「耕し」は、田畑の土を鋤き返して作物の根が伸びるように柔らかくすること。昔、農家では牛馬や人力などで耕し重労働だったが、今は「耕し」から収穫まで機械化され、少しずつ楽になつてきたようだ。

耕された真つ黒な柔らかい土が、降る雨をぐんぐん吸い込み生氣を取り戻す。日照り続きのあとに降る、万物みな待ち望んだ恵みの雨「喜雨」という季語もある。「雨を吸ふ」と詠みきつたことで「耕し」の後の景色も想像出来る。

夜桜の奥にひそめる魔界あり 大内佐奈枝

「夜桜」「ひそめる」「魔界」とちよつと心が騒つく言葉がならんでいる。「夜桜」は、ライトアップされ、より一層美しい桜を見物することが出来る。作者は明るく浮かび上がった「夜桜」の奥の闇に、悪魔の世界「魔界」が存在すると、断定の「あり」で詠み下している。人は心の内に悪魔と天使、悪人と善人など両面を持っているが、上手く使い分けているのではと、深読みをしてみた。全てを読み取ることが難しく、謎が残る句であるが、興味は尽きない。

白旗の手旗信号 磯開 名和政代

春の季語「磯開」は、大潮の日が近い、潮の引いた磯辺で

一日を過ごす風習。磯祭とも呼ばれ、春の行楽の一つである。右手に赤旗、左手に白旗を持ち、上げ下げして遠くの相手に通信する「手旗信号」。「白旗」ということは、待ちに待った解禁という合図。楽しそうに海藻や貝などを採っている大勢の人の姿が見え、明るい声が聞こえてくるようだ。

人との距離を保つことが出来、子供はもちろん大人も楽しめる磯遊びは、コロナ禍の今、最適ですね。

友の訃や桜吹雪の中に聞く 山本 絢子

桜の名所、神田川での句と思う。友人の訃報を受けたのは、満開の桜が川風に舞い散る中でのこと。楽しい時間が一転、悲しみの時へと。作者の心中を察するに余り有る。

しかし、掲句に心情的な言葉はない。ただ桜の中に立つ自分を写生することで「桜吹雪」の美しさが強調された。

いつも若々しく楽しい俳句を見せて下さる絢子さんは、大正生まれ。私が勝手に「東京の母」と慕っている方であり、大切な句友。いつまでもお元気で。

虻羽音猫に走りし目のひかり 杉浦 一子

「虻」は、二枚の羽と大きな頭と美しい光沢の複眼を持つ。羽が強く飛ぶ時には唸りを発する。花の蜜を吸う「花虻」は春の季語、人や牛馬に付き血を吸う害虫の「牛虻」は夏の季語である。

「虻」の羽音に反応して目が一瞬キラリと光り、相手の攻撃に身構えた猫の様子を、分かり易く表現した。

御自宅で大事に飼われている猫なのでしょう。大好きな猫のことだからこそ、小さな変化を見逃さずに授かった一句。

朝な朝な牡丹の花芽確むる 海野みち子

庭に出て「牡丹の花芽」を見る朝の日課、ちよつとした幸せな気分を味わう事の出来る大切な時間。日々の小さな変化に一喜一憂している作者が目に見えるようだ。「確むる」はきつと花芽の一つ一つを指先確認しているのでは。

華やかな牡丹の花の句も良いが、花芽を詠んだ句は珍しく素直で心にすつと入り込み、優しさを感じさせる句である。

校長とハイタッチして卒業す 平岡 功

微笑ましく、ほつとする光景である。この御時世「ハイタッチ」は、喜びを表わすには最高、言葉はいらない。

学校行事が普段どおりに出来ない今、苦勞して漸く、執り行えた卒業式。

子供達の笑顔はもちろん、子を見守る家族や先生達の喜びの様子も窺うことが出来る。分かり易く好感の持てる句。

選評の際、面識のある方は、お会いした時の事を懐かしく思い浮かべ又、面識のない方は、お住まいや年齢から私なりに、いろいろ想像して俳句を読ませていただきました。改めて「万象」の方々との絆を強く感じる事が出来ました。

一年間続けられた事、心より感謝いたします。

飛高俳句の魅力

— 飛高隆夫「川あかり」 —

喜多尾明子

主宰内海良太氏の跋によれば、「川あかり」は遺句集として、「飛高さんらしい個性の輝く句」を収録したとある。まことに「飛高ワールド」の魅力にあふれた句集であった。

蠅の高く舞ひたる野分あと

穴を出て十日の蟻の速さかな

ひとしきり騒ぎし鴨のまた静か

白鷺に枯野の光集まれり

日翳りて寂光の白冬牡丹

どの句も姿が美しい。一句目、二句目の虫たちの生のよるこび。羽を広げた蠅の姿は鮮やかに幻想的でさえある。三句目は鴨の騒ぎが収まって静けさがもどった池の情景が目に見える。四句目の枯野の光をまとう鷺、五句目の日暮れの冬牡丹、共に静寂の中に「白」の美が印象的に浮かび上がる。

飛高氏は「万象作品」の選者として責務を果たされ、自身、自然詠の佳句には事欠かない。一方でまたこの句集では、「万象」の掲げるいわゆる「即物具象の写生」とはいくぶん異なった趣の作品に出会うこともしばしばで、興味が尽きない。

例えば自意識の前面に出た、主観の色濃い句に目がいく。

火の番の月見るわれを訝しむ

肘ついて風を見てゐる晩夏かな

藤の花やはり触れたく触れにけり
鶏頭の暗ければもの思はする

とはいえ句が観念的ということはない。「寒夜の月」や「夏の風」、「藤」や「鶏頭」に心惹かれ、対峙する自己を具象化するという飛高流の「即物性」、「対話性」なのだ。

飛高氏は常識や既成の目でものを見ることをしない。あくまで己の感性を信じて、見、感じ、発見し、言葉にして認識する。対象のもつ命や本質を捉え、表現しようとする。

唇に触れかくも冷たき落椿

山茶花を咲かす力がまた散らす

風が若葉を若葉が風を冷やしをり

かなかなの近くに鳴きて遠き声

落椿の冷たさへの驚き、山茶花に見出す咲く力と散る力の等価、風と若葉の織りなす五月の冷え、懐かしさを誘うかなかなの声の遠近感の不思議。その捉え方は感覚的で、ユニークである。

飛高句に多く見られるのは絵画的、平面的な描写よりも時の流れ、季節の移ろいとしての自然詠だ。命とはまさしく時間の流れなのだから。

日や風や牡丹に時止まらず

銀杏散りもう散るものも無くなりぬ
秋の雨降るたび秋の衰ふる

これら三句はネガティブな表現で、一見わびしい。牡丹も銀杏も秋そのもののさえ、萎え、散り尽し、衰えると詠む。しかし氏は枯れや衰えを自然の実相として、諾い、愛おしむ。そうした心情は氏が好んだ暮色や翳りからさらに夜へ、闇へと傾斜する。それは暗く陰鬱なものではなく、うつくしくも心やすらぐ、親しみ深いものなのだ。

松手入れ済みたる闇の鮮しき
夜の新樹闇より黒くありにけり
満月と花を浮かべて大きな闇
五月闇手に触るるべくありにけり

こうして長い夜と闇との親交の後は、それらが醸した明るい光の世界に感動する。

空眩し雲なほ眩し祭来る
滝となる嬉しさに水躍りけり
きざらぎと呼べばきらきらして来たる
いのち減る青葉若葉の眩しさに

一句目から三句目は擬人法が躍動感を生み、喜びにあふれる。四句目は令和二年の作で、氏にとつて最後に見た青葉若葉。その眩しさに圧倒され、「いのち減る」と詠んだ。

飛高氏が近代詩の研究者であることはよく知られている。飛高俳句に顕著なリフレインや対句による韻やリズムについては、主宰が跋で指摘しているように、「長年親しんできた近

代詩で身体に沁み込んだリズムが自然に表出されたもの」であるだろう。同時に飛高俳句が内包する近代詩的リリズムも見過ごすことはできない。

中原中也、立原道造における青春の清純と屈折、伊藤静雄や宮沢賢治の謳う愛と悲しみ、萩原朔太郎における存在の不安や孤独。それらは飛高氏の心と響き合い、終生共にあったのではなかったか。

76歳から83歳までのこの最後の句集にいわゆる老人句や境涯句らしいものは見当たらない。飛高句には大成や達観、諦念は無縁なのだ。あるのは濁りのないみずみずしい感性だ。

最晩年に近づくに従い、氏は自分の生を肯定する。そして句は澄んだ平穏な姿を見せているように思われる。

寒夜かなわれを諾ふ父の声
あめつちの光の中の余寒かな
水飲みて亡き人偲ぶ緑の夜
夜風よき五月となりぬ闇親し
行く雲のふえて九月となりにけり
二句目以降は最後の年の作。そして辞世の句となった、
流れ星見たことにして眠りけり

には、ナイーブな、いかにも飛高氏らしいユーモアが覗く。『川あかり』の扉に掲げられた氏の遺影、優しく物思わしげで、そして幾分恥ずかし気なそのお顔に再びお目にかかることはない。けれども私たちには、消えることのない川あかりのように、心に残る無二の俳句が遺された。

藤の花を愛した詩人

— 飛高隆夫『川あかり』 —

大林 彬 彦

芥川龍之介は言葉をピンセットでつまむと言われたが、飛高先生は、金や銀のスプーンでそれを掬っているなという感じがした。つまり同じ言葉の選択でも正確さに優雅さが加わってさらに光っているのだ。光る美は昔も今も最高の美。

きさらぎと呼べばきさらぎらして来たる

きさらぎと声まき散らし冬の鳥

光る美の創造と発見。この喜びを心の糧に先生は豊かに生き抜いて居られたのだ。

先生の生の歓喜の表現は、

滝となる嬉しさに水躍りけり

という句にも顕著。翻筋斗打って落ちる水の歓喜の発見！なかなかこう詠んで呉れた人はいない。純心や邪気なき詩人へのみ可能な発見と表現だ。水達と一緒に私の心も躍る。

雪の茶室死ぬよと人を諫むる声

河童忌のかく暑かりしその日かな

百日紅咲きはじめたる我鬼忌かな

生か死かは普遍的な問。「生は死しておさらばする程の価値は非ず」と漱石は撃退している。何か漱石的論法だ。芥川を鍾愛しつつ先生は乗り越えた。死神の声に耐え、猛暑にも火焰の花にも耐え、その死は否定して生き抜いたのだ。なぜな

らば数数の美の発見とそれを創造する喜びが生にはあるからである。かくも度度芥川を悼むのはその文学への絶対的な高評価とその承認であり憧憬であろう。芥川への頌と惜別。

河童忌の夜を稲妻のほしいまま

芥川の一生の栄光と消滅をパッと一句で照らし出してみせた句。惜別の思いの深い句。併し芥川は瞬間美に拘った。

真夜覚めて月高々と漱石忌

漱石に対して高い敬意を払っていることがわかる句。中七の「月高々と」に表われている。漱石の文明批評は今なお新しい。現代に生きる私達の運命に寄り添い忠告を発している。漱石は芥川にも「牛になれ」と忠告している。芥川の本質を看破し瞬間的印象しか与えないと。その通りになった。漱石が生きていたら芥川は自殺していたかという議論があつたと塩田良平先生から承った。塩田先生は吉田精一先生（飛高先生の恩師）と共に近代文学研究の開祖。私は手紙で恩師塩田先生のことを飛高先生にお伝えした。その時先生から返信と句集を戴いた。その時の話題になった一句。

咲き満ちてきて厄介や白木蓮

私が府中の暗闇市で買ってきた白木蓮の木に悩まされている事を書いたのに対して自句を紹介して下さったのだ。白木蓮は根強く実には堂堂と西庭に伸びた大木で、白い燈のような

大きな花をずらりと天高く掲げて春を告げる。道行く人人も感嘆の声をあげる。私も自慢げで得意だった。所が白木蓮の天下はここ迄。あとが大変大童。ぽたぽたと散り実にごきな土色になる。隣近所からの苦情。これが春の変。次が冬の変。大きな葉が枯れてカラカラと隣近所へ散り放題。平身低頭葉の収集。まったく「さて厄介や」。痛い程よくわかる。しかしこの表現は絶妙だ。木蓮の神神しく尊い大白花への逆説的愛情表現なのだ。厄介者が今年もすばらしい名花で春を飾って呉れてありがとうの心。厄介という否定を否定する心あつての厄介の使用。でなければ題材を選んで詠むことはないだろう。心中語を投げ入れての独特の表現、一つの飛高調とは言えまいか。本音で傷つけず逆に愛が深く絡まってゆく。花鳥風月・雪月花の伝統美を飛高俳句は実によく踏まえ自分の感受性の中に取り入れて表現している。五句を挙げる。

日や風や牡丹に時止まらず

藤の花やはり触れたく触れにけり

小鳥来て心高きに誘へる

せはしなく降り出しにけり牡丹雪

月仰ぎつつ年送り年迎ふ

時刻と変わる美の姿のあわれさ。花の柔らかさに触れる快感。心を高めてくれる小鳥の気高さへの嬉しさ。急ぎ足に訪ねてくる雪への感謝。去年今年の時の中で永遠感を味わえる月。凡て即物具象を踏んでの吟詠。しかしそこにそこはかとなく女性の影を私は感受して味わい楽しんでる。牡丹・藤・

小鳥・雪……そして月。月を仰ぐ在原業平。彼の愛した王朝の美女たち、すなわちエロスの花。「触る」が鍵語と私は思う。

唇に触れかくも冷たき落椿

墓灼けて手を触るること拒みけり

触るるべきものにはあらず黒揚羽

艶福家の先生にそのような花がないわけがない。謎は碩学に任せよう。兎に角、令和の光源氏は昇天してしまつたのだ。単なる現実模写の句なのではなく、象徴や比喩にも心して読むべき所があるのではないかと言いたいのである。含羞の人として俳句もそのような綺麗事として片付けてよいのか。

藤の花夕べとなれば火を欲す

というような句をどう汲みとるのか。人間の本质としてある官能や本能といったものを「火」と比喩的に表現し、底知れぬいのちの業の火を畏怖しているのではないのか。含羞の仮面を脱ぎ捨てた夜叉の面ではないのか是は……。

よく鳴らぬこの風鈴と五十年

この風鈴は奥様の比喩か。逆説的愛情表現。鳴る時は実に綺麗に鳴り快適。鳴りすぎるとややうるさいのだ。音の大切。

柿好きで母情の熱き母なりし

みの虫の父よと恋へばわれも恋ふ

これは孝の美德。父母への永遠の感謝のあらわれ。美しい。

流れ星見たことにして眠りけり

流星に何の願をかけたのか。平和と「万象」諸子への思いか。「見るべきほどは見つ」という思いも……。

俳句カレンダー掲載句自註

俳人協会発行の今年の「俳句カレンダー」には、万象から五名の方の句が掲載されています。掲載月の万象誌で作者の自註を順次紹介します。

鬼灯の袋の中の広さかな 中村千久

お盆の頃になるとあちこちで、枝に付いた橙色の鬼灯が売られるようになる。ご先祖様の道案内をする提灯に見立てたものだという。袋の中にはやはり橙色の小さな実があつて、子どもの私は姉たちと、その実を指先で揉んで種を楊枝でほじり出し、唇に当てて笛のように鳴らして遊んだ。

鬼灯の袋は中にある実と比べると不相応に大きいのではないか、そんなことを思っているうちに、ひよいと袋の中にいる自分を想像してみたら、「袋の中の広さ」という言葉が降りてきた。不思議の国に飛び込んだアリスが別世界を眺めている気分になった。小汚いオヤジのアリスなのだが。

令和4年版俳人協会編「俳句カレンダー」ご案内

体裁 月別 表紙とも十三枚綴り壁掛用
内容 表紙 鍵和田袖子

鷹羽狩行・西村和子・伊藤伊那男・小野寿子・
ながさく清江・小倉英男・小川軽舟・森川光郎
岸原清行・岡田日郎・今瀬剛一・大高霧海・
加藤耕子・藤井園彦・山尾玉藻・下鉢清子・
渡邊狐鷄・中原道夫 (掲載月順)

(表紙を含み四八七句・ジュニアの俳句十三句掲載)

「万象」からは、6名(石田野武男・呉屋菜々・佐藤哲・
佐藤雄二・三澤治子・山本絢子)の句が掲載されます。

頒価 一部 一、二〇〇円

送料 一部 七〇〇円・二部 一、二〇〇円・
三部 一、〇五〇円 (郵便料金)

四部以上については実費(宅配便)

発送予定 十月初旬より

申込先 〒168-0007

東京都杉並区高井戸西2-18-1107

久留島規子

(TEL 080-11297-6113)

* 送付先の住所・氏名・電話番号・申込冊数を明記の上、
句会ごとにまとめて、はがきでお申し込みください。
* 代金・送料はカレンダーの発送後、請求書を送ります
ので送金願います

申込締切 令和3年9月20日

同人アンケートのまとめ

編集部

「万象」創刊二十周年を節目として、編集部では「万象」誌を刷新する方針を確認し、その参考とするため全同人にアンケートを行いました。回答数は149（回答率91%）でした。

①「内容の評価」では、「大変満足している」41・6%、「まあ満足している」50・3%という数字が示すように、「万象」誌は好感をもつて受け入れられていることが分かりました。

②「『万象』誌をどの程度読んでいるか」という質問には、「ほとんどすべて読む」51%、「興味あるもののみ読む」43・6%という結果から、同人の皆さんが本誌の良い読者であることが分かりました。

③「万象」の目次にある23の企画のうち、よく読むものに複数回答を求めた結果をまとめたものが左です。

【上位となった企画】

- | | |
|----|-----------|
| 1位 | 主宰・副主宰作品 |
| 2位 | 同人作品の佳句 |
| 3位 | 万象作品の佳句 |
| 4位 | 風音集 |
| 5位 | 同人作品 |
| 6位 | 今月の句（表紙裏） |
| 7位 | 同人特別作品 |
| 8位 | 続・万象とともに |

9位 同人作品評

10位 あとがき

11位 万象作品

12位 特別作品評、東西南北

【上位に入らなかった企画】

▲「自選句鑑賞」「万象招待席」「万象招待席評」は、令和3年での掲載打ち切りを発表済みです。

▲「俳書探訪」は他結社の動向を伝える企画ですが、同人の皆さんのこの企画への関心は高くありませんでした。各自が総合誌等から情報を得ているとも考えられます。

▲「中央句会報」「同人句会報」は首都圏の作品のみが発表されているので、全国ネットワークという観点からは偏りのある企画と考えざるを得ません。

▲「珈琲タイム」「珈琲ぶれいく」は、主として会員の皆さんの勉強を進めていただくとう企画したのですが、既に俳句や言葉の知識を蓄えている同人の皆さんには、もの足りないものなのかもしれません。会員の皆さんの声も伺いながら検討を進めていきたいと思えます。

自由意見に寄せられたさまざまな回答は、今後の「万象」誌を充実させてゆくための検討材料とさせていただきます。また、編集部への温かなご理解とご支援のお言葉も頂戴いたしました。御礼申し上げます。

万象ノオト



テーマ「犬」

犬と私

茅ヶ崎 久保田富士子

近所の酒屋の飼犬コロは毎年子供を産んだ。その春生れの子犬が我が家に来た。雄なのでジョン。当時よくある名前だった。犬の食事は御飯に味噌汁、魚と粗末なものだったがジョンは何でもよく食べ足の太い大型犬になった。毛並みは白に黒の斑「ホルスタイン種の牛の子みたい」と皆に言われた。鎖に繋がれることなく大人しい番犬だった。しかし特筆すべきは野犬狩が来ると、遠吠えし仲間を引き連れ段々畑の蜜柑山に隠れた。何時の間にか地域のボスになっていた。その後私は結婚し、子供達の希望でダックスフントとの生活が二十五年、犬友も沢山出来た。

ここ十年程犬の居ない生活だと思っていたら、夫が戌年生まれだと気付いた。野菜作り等して未だ未だ元氣である。犬との縁は切れそうもない。

ブラム

甲府 江口嘉郎

愛犬の名前はブラム。樹齢70年余の「李」の下の小屋に飼われていた。14年前の夏、65才で千葉から故郷の甲府にUターンし、菜園を借り、犬を飼い始めた。茶虎の甲斐犬とラブラドルとのミックス犬の雄、生後三ヶ月で譲って頂き、「すもも」君ではなく「ブラム」と名付けた。朝の散歩は6時頃に、武田神社近くの借地菜園まで30分かけて行き、一〜二時間程の作業の間は大人しく待っており、通りすがりのワンちゃん達とも仲良しになった。ところが、半年前から歩行困難に、遂には小屋からも出られなくなつて一週間、吠えもせず鳴きもせず13才4ヶ月で息を引きとつた。朝夕の散歩は欠かさず、歩くことの大切さを教えて貰

い、私は病氣知らずで4月に傘寿を迎えることが出来た。有難う！有難う！！

愛犬マーチ

横浜 小坂橋泰山

雄のシーズー犬マーチは、家族の皆から愛された我が家のアイドルであつた。娘の希望で彼女の12歳の誕生日、1996年11月に、マーチは我が家にやつてきた。ゴールド・ホワイトの毛、この犬種では大型で、成犬時には7¹/₂はあつた。とても人懐こい性格で散歩で出会う人達にも可愛がられて、同じ犬種やマルチーズ犬の友達もたくさんできた。朝の散歩と毛のカット・ケアが私の仕事。夜型だった私は朝五時に起床してマーチとの散歩で朝型人間に変身した。遅い帰宅時も、玄関の上がり框で待っている、可愛い犬だった。色々な事があつたが、2013年に17歳で亡くなるまで元気に過ごせた事が何よりだった。多くの写真やハサミ、櫛等は今も大事に保管している。

ジョン

市川 奥澤よし江

父が、生後間もない子犬を連れて帰ってきた。秋田犬の雑種。名はジョン。その相貌はジョンというより熊公が似合う。父は廃材で犬小屋を作った。

食欲旺盛でスイカや蜆汁等何でも食べた。散歩は朝と夕方。いつの頃から散歩から帰ると、屋根に登り四肢を伸ばし潮風をほしきままにするようになった。時に綱を外されて自由の身となることもあったジョンは、部活で遅くなる私をいつも学校の裏門で待っていてくれた。

ある日ジョンの迎えがない。家に帰ると横たわっているジョン。どうやら畑の毒餌頭を食べてしまったらしい。すでに獣医も手の施しようがなく、そのまま息を引き取った。脳裏に残る約半世紀前の唯一無二の犬ジョンである。

イマドキは…

札幌 北浦詩子

イマドキの犬は寒がりだ。わが家で

飼っていたマルチーズは、長い毛に纏わり付く雪が冷たいのか、雪道を散歩させると、震えながらすぐに抱っこをせがんだ。家に戻ると、ストープに鼻先を向け、ほっとしたように昼寝をしていたものだ。友人の犬も似たようなもので、寒い日には全力で前足を突っ張り、外に出るのを拒むのだとか。

近頃のペットショップには、犬用のレインコートやフリースのベスト、ダウンジャケットのほか、ブーツまで揃い、さながら子供服売場のよう。それを身に着け、散歩をしている犬たちも、まんざらでもなさそうだ。

童謡「雪やこんこ」の作詞者は不明だが、今頃は「こんなはずではなかった」と、草葉の陰で嘆いているのではなかろうか。

クロちゃん

東京 島野ひさ

東京のご真中に育ち、名前は知っていても疎開地としか思っていなかった練馬で、私は世帯を持ちました。

主人は朝出勤したら残業残業で真夜中の帰宅です。二才の息子と年子の娘と三人の心細い毎日でした。

そんな或日、主人が真つ黒な子犬を抱えて帰宅した時は嬉しさより驚きでいっぱいでした。ダックスフンドの子犬が沢山生まれたから、と言われて即答で貰ってきたと言うのです。可愛いかったけど、私には戸惑いの方が大きかった。家には子供達に乳をのませるための山羊もいて、近所の腕白もうろうろと何やら夢中の日々でした。

真つ黒な犬はクロちゃんと呼ばれ、私に一番懐いてくれ、今では懐かしく忘れられない思い出です。考えてみたら私の干支も犬でした。

「万象ノオト」投稿募集

▽1月号 「森」 (9月末日締切)

▽2月号 「はさみ」 (10月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田 美穂子

万象作品

小林愛子選



履歴書の角二封筒街薄暑 東京 桑原優美子

夕立あと宅配便の濡れてをり

青梅雨や椅子一台の理髪店

梅雨の路地無音で停まる救急車

龍神の錠は木の枝青時雨 新潟 高野松風

青時雨街に西池東池

赤松のなぞへ一閃夏燕

葉桜をゆらす風あり花守忌

噴水の高さがへて崩れけり 横浜 小坂橋泰山

白日傘嬰兒の耳に日の透けり

先頭は宿の提灯ほたるがり

土砂降りのなか母を追ふ子鹿かな

月食や赤の余韻の五月闇 札幌 北浦詩子

独活の皮ひたすら千切りきんぴらに

初摘みの庭のいちごの二つ三つ

夕日へとサーファアの群れ腹ばひて

田水張る大河の水をもらひたり 福岡 宮田千恵子

噴水の青空にふれすぐ落つる

落ち梅や一日雲のたれこめて

突然に姉の忌となり夕薄暑

天城嶺に薄雲走る春の海 静岡 本多ひとみ

ロープウェイ見上ぐる先に山桜

線香の煙真つ直ぐ仏生会

紙袋一つ足したり蓬摘み

神苑に雀の群れて夏きざす 新潟 佐藤幸示

朝日透す櫟若葉の駅通り

産土神のふつくらとした八重桜

庭に生ゆ木の芽の味の日々に濃く

羽二重にむらさき滲む花菖蒲 東京 三村紀子

あぢさゐの濡れて極まる青さかな

蜂の巢の未完のまゝに渴きをり

やうやうに枝を捉ふる鳥の子

羽蟻生る観音様の足許に 石井 木内マヤ

でで虫を踏んでしまひし日の懺悔

フラメンコダンサーのごと立葵

はらからの集ひてカレー夏の寺

水着の子海へまっすぐ坂下る 佐野 菰原美穂子

砂浜に耽読の人白日傘

夏木立ハイカーの声響き合ふ

木下闇万葉歌碑のくつきりと

西洋館までメタセコイアの路続く 横浜 三木豊子

花筏含みてはきて鯉の口

防虫香かすかに残り一重帯

日は落ちぬ線路の端に月見草

忘れたることも忘れし臙かな 佐介 鈴木美根子

更衣意外に太き腕かな

ト音記号ほどはねぢれぬ振花や

しやばん玉空に七色増やしけり

新緑を分けて流るる豊平川 札幌 石田 睦

せせらぎと競ひ歩けば汗ばめり

通勤の道ライラック香り立つ

紅き蕾開けば真白花りんご 佐々木 茂

夕べには散るはまなすに虫たかる

蝕の後は清浄の白初夏の月

初鳴きはファンファアレのごと蟬生まる 島崎 洋

ダム湖へと続くトンネル燕来る

揚雲雀母校の在りし丘に立ち

葉桜や背になじみたるランドセル 園田 鶴子

家ごとにリラを咲かせてリラの街

目を閉ぢて草に安らぐ通し鳴

錫杖を振るや白南風総身に札幌高山誓英

しろめしに鰹と葉味ちよと醤油

再びのギプス鬱々リラの雨

雨の舗道連翹の黄の点々と

睡蓮の葉起こす鱗の強きかな

青松葉飛びちるほどの雨と風

母の日や会へずに仰ぐ母の窓

残雪の遠嶺や川はひかりつつ

花冷えや羽音尖らせ鴉来る

確と掴む祖谷の吊橋山笑ふ

赤黒き皆既月食卯月かな

雨上り貸農園に豆を蒔く

家中の押入れ放ち青葉風

シーソーの順番を待つ夏帽子

白服の糊を利かせしポニーテール

帰省出来ぬ姉に蕨のクール便

山藤の杉に絡まり天を突く

桜蔭掃くこと惜しむ熊手かな

小流れや黒堀沿ひの杜若

葉山嶺を真直ぐ望む青田道

札幌

高山誓英

竹重富子

谷 廣司

吉田克己

太田佳美

新庄

曾野部礼子

東根

門脇好子

神域の手水に入れし夏椿

農日記雨と一文字梅雨入かな

虞美人草風のまにまに揺るるなり

群雀飛ぶたび落つる桜の実

ありなしの風にひなげし皆動く

ブランコを漕ぐ子漕がぬ子空真青

仕舞屋の軒にひた鳴く初燕

新妻の指にリングや聖五月

田園に一家総出の端午かな

馴染の猫今日も来てゐて五月逝く

日本海の涼風真すぐ我が家かな

境内の松三百年風涼し

大夕焼顔ぶれ揃ふ砂丘かな

軒下に田植機を据ゑ明易し

田植曇りのひと日昏れゆく峡の村

郭公や予防接種を終へしとき

川工事新緑の山削りけり

トロ箱の軽々と飛ぶ青あらし

あつけなく抜けてゆくなり梅雨の草

踏切のかんかんかと青田風

新潟 齋藤

信

榊原キヨ子

佐藤シズエ

島津治子

中塚滋子

燕

渡辺志ま

宇都宮

福田 弘

どつぷりと浸る露天湯河鹿笛
縄文の遺跡に積る夏落葉

紫陽花や折りたたみ傘持ちて出る 芳賀 埴 テル

五月晴和室四部屋風通す

色つきし実梅たわわの空家かな
蜘蛛の囲を杖の先にて絡め取る 福武幸子

足し苗を植うる足元おぼつかな
湯疲れのからだ休める籐寝椅子

朝の日に光る若竹葉擦れ音 真 岡 上野恭子
夕立去り賑はひ戻る商店街

初生りの胡瓜は二十一センチ
雨降りて田植日和となりにつけり 鹿沼 渡辺 利子

田植機の音の重たき小糠雨
鴉居ぬ間に落花生蒔きにけり

木漏れ日の流れきらきら蕁かな 栃木 飯塚キミ
畦川に蛸蛄ぬうつと鉄上ぐ

夕さりの空を旋回夏燕
麦秋や線路をつつく雀どち 佐野 荒川 進

青蘆原見え隠れする子の帽子
小満や田水の中へトラクター

夕闇は月下美人の香をつつみ 佐野 飯塚満里子
鴨足草の花は小風と戯れて

雲巖寺溪風揺らす松蘿
砂遊び裸足の子らの肌白し 金子恵子

浜昼顔沖に光りしカーフェリー
早苗田の奥の静寂や円仁像

ぼうたんの微笑む遺影包みけり
斎場に向かふ山畑雷ひとつ 木村君子

金鶏菊庭中蝶の舞ひるたり
単線の灯り植田に走りゆく 黒川しげ子

雲の峰山羊は無心に草を食む
あかときの月背にある草引けり

腰叩くこと繰り返す草掻り
治療院の甕の緋目高はげませり 齋藤ミチ子

梅雨の蝶下りる遮断機躲しけり
吹奏楽の青芝生樂し高校生 関口かつ子

ハーブ園白芍薬の香り立つ
田の水のさざめく夕べ筍飯

小流れに影くつきりとあめんぼう
青楓下枝より揺れはじめたり 店網洋子

朝の池にはかに鳴けり牛蛙

岩蔭の河鹿の声の響きけり 佐野 仲山さよ子

空映し水なみなみと代田かな

川音や山の斜面に著莪の花

テトラポット浜屋顔の葉はハート 義本美智江

茅花流し岩打つ波のリズムかな

虎が雨打つチコリーの花芽にも つくば 藤原善明

走り梅雨土やはらかに自家菜園

葉桜の日影ホームに濃くなりぬ

酒蔵の香りふくよか緑さす 古河 青木正男

毛糸玉手繰り寄せても母は亡し

火取り虫髪すく膝に来て撲たる

おひまちの喧嘩が通る水の番 さいたま 須藤初枝

六月や夜空に飛べるヘリコプター

濃あぢさゐ日毎に青さ増しにけり

満開のつつじ好みししじみ蝶

闘病の友逝きし報山法師 志木 汐見克彦

あぜ道に田打の土の点々と

浮草の田の片隅に吹かれをり

リハビリの足の重たき麦の秋 森山洋之助

夕暮れの鴉ひと鳴き合飲の花

青梅雨や将門塚に供花絶えず 川越 岡野輝子

万緑やワイシャツの白翻へり

白菖蒲かすかに動く池の水

揺るる葉と共にゆれをり青蛙

夕暮れて涼しき風の川辺かな 常見イツ子

突いて出し酢醬油さつぱり心太

浴衣着て仕種しなやか蔵の町 千葉 大月玲子

じやがたらの花は紫黄昏るる

梨棚に身を屈めては袋掛

かな文字の流るるやうに苔清水

二年越しアリア学びて夕立雲 岡野恵美子

門口に山盛空豆友の来て

隠れぬし絹さや太りて豆ごはん

一世紀生きて今年もカーネーション 喜多恭仁子

コロナ禍の早や真夏日の梅雨入前

実梅もぐ届かぬ一つ残したり

合飲の花山羊のよく食む日暮かな 高田みや子

そよと来し諍ひあとの団扇風

袋掛お岩木山に雲の散る

夕菅の六甲山系日は西へ千葉松浦陵保

宿坊の朝餉に添ふる粽かな

銚子港入梅鰯の活気かな

夕焼や醤油の匂ひに母想ふ

足元に草のさざ波風薫る

木々切れば六月の空現るる

渉り来る木橋弾むや夏近し

酒々井

小林あけみ

防空壕跡へ茗荷の子の揃ふ

浦風や垣根際まで田植終へ

微の香も歴史の匂ひ博物館

佐倉

新谷八郎

ランプの灯遙かになりし凌霄花

昼は畑夕寝覚めれば夏の月

とりあへずなにもなければ冷奴

レジ袋コンビニで買ふアロハシャツ

あぢさゐや幽かに読める道しるべ

田植機のあとを苗持つ子らが追ふ

手のひらに残る苺の甘き香よ

紫蘭咲く庭に歩幅を緩めけり

種袋振つて飛び出す日の欠片

引鴨の一羽残りて岸暮るる

柳澤道子

有泉正夫

杉田富美代

鈴木隆久

棟上げの音運び来る初夏の雲

畦に立つ今朝の一步に田の温み

佐倉

立原千代子

早苗饗や田の神様を上席に

葭切の高音響けり沼舟に

遠浅や足裏くすぐる桜貝

バラ園は花粉まみれの虫多し

札状の墨摩る夜の扇風機

香り立つ愛媛訛の花蜜柑

船橋

入河 大

低きは海猫高くは鳶の空の道

仁王門へお遍路さんの雨宿り

めだかの子つんつん行けり昼下り

軽鴨の親子せはしき川明り

一里塚大樹にやさし若葉雨

ふるさとの山野夕雉鳴くところ

大蟻も小蟻も急ぐ石畳

羊羹の甘き重さよ新茶汲む

翡翠の大きき嘴美しき

紫陽花の咲きたる寺にお参りす

茄子あれば食事のたのし二人かな

コクリコも虞美人草も芥子の花

米田敏子

内田節子

槐島 修

近藤澄子

山口秀吉

コロナ禍の二年も聞けぬ祭笛
「がん漬け」や川蟹砕き塩辛に
掬ひたる浮草指にからみつく
子の指に追はれ追はれて目高の子
夏鴨のぺたぺた歩く河原風
遠雷や息急ききりて渡る橋
蚊帳の裾ぱつとしづかに捲るべし
髭剃りて髪切りて子や梅雨に癒ゆ
咲き乍ら又散りながら藤の花
山彦にやまびこ答ふ夏の谷
大火鉢叩くと寄れる目高かな
春雷の去るや夕映え美しき
ばら園にばら談義聞く木椅子かな
磨かれし玻璃戸に揺るる若葉かな
梅雨晴や湖畔に鳥の博物館
繭の花垣根づたひに帝釈天
青芒信濃古城に隠し井戸
葉桜のささやきを聴く仁王かな
夏燕翻りゆく川面かな
沿線に白詰草のびつしりと

柏

鹿毛満子

松戸

石川幸子

菊岡緋路

清水礼子

野田成夫

渡部洋子

花蜜柑ワルツに合はせモップ掛け
遠い日の匂ひ青々麦藁帽
爺と犬阿吽の息よ夏の海
平成九年父の手描きの梅酒瓶
パズル解くハングル文字や明け易し
待ち受けの花に止まりし小蜘蛛かな
さみどりは安らぎの色新茶汲む
青嵐や笑ひころげる便り来る
縁日に金魚すくひし日の遠き
花の散る川面きらきら神田川
あへぎつつ坂上り来て花馬酔木
ひさびさの食卓にばら卒寿の日
マネキンも街行く人も夏めけり
山女釣るみどりの山を真向ひに
閑散と貸ボート場杜若
乗り換へのプラットホーム風薫る
壁面を覆ふ茉莉花街匂ふ
落し物白詰草の首飾り
忘れぬし服と出会ふや更衣
藤寝椅子地震に驚く寝入りばな

東京

安藤美酒々

石井登女

石山風童

北口富栄

小池清晴

高野翠子

乙女像の指しなやかや青時雨

黒南風に押されて坂を登りけり 東京 田崎京子

オール漕ぐ腕の強さや夏来たる

中川のボートの飛沫風光る

梅雨に入る小さき長靴跳ねる子等

池の水汲みてチャブチャブ跣足の子

石垣島の皆既月蝕写メール来

畑の蛇棒に吊せる農夫かな

気乗りせぬ健診終へて昼寝かな

あぢさゐの路地いつばいに傾けり

おひ茂る杜の緑の迫りくる

若みどりそれぞれの色競ひ合ひ

タンポポの黄色爽やか今朝の杜

掘削機うなる現場に夏つばめ

尼ごぜの背伸びして剪る垣若葉

能登瓦つやめくいらか梅雨晴間

降つてゐて雲の明るき朴の花

雨の日は雨の日の色濃あぢさゐ

わがものと庭の一枝を雨蛙

田植待つ田に魚沼の空映る

鶴田智美

中澤桃子

西村サカエ

長谷川信也

馬場美智子

平子甲奈

魚沼に山菜を摘む立夏かな

五月場所優勝戦へもつれ込む

夕日浴び棕櫚の花房黄金いろ 東京 平田隆敏

睡蓮を少し揺らせて鯉のひげ

夕暮れの人みな美しき花あやめ

三回忌妹の好物枇杷供へ

花菖蒲農家の勝手水速き

芍薬の真紅屋上庭園に

ネモフィラの広がる果ての花の空

出目金の宇宙遊泳尾のゆるる

梔子の香りのとけて風甘し

競り台に朱く輝くさくらんぼ

花市場山と捨てられカーネーション

トラックにパイナップルを山積みに

紫陽花や今朝の川辺の薄緑

輪唱の下校の少女麦の秋

ミストレス窓に垣根に薔薇溢る

チューリップ句友植ゑたるりんご箱

菜園の隅に整列ねぎ坊主

盆栽の実桜一つ天をさす

藤田信子

本多 葵

松井宣夫

松本幸男

山森明子

チュピチュピと小鳥来てをり枇杷たわわ 三鷹 南場雅子

夏ぐみの水辺に垂れて真紅なり

サボテンを買ひ青春の孫なりし

少年らつつき遊びの蛇丸く 府中 竹村晃子

あちこちで螢呼ぶ声野川縁

芍薬の崩るる音の夕べかな

青空へと山法師の花開ききる 国分寺 中ノあさ子

大木の天辺で鳴く閑古鳥

空青し青芝踏みて友リハビリ

ワクチンを接種後の風素馨の香 国立 阿部幸子

小園の唧筒おほふ蔦青葉

梔子や変はらぬ日々の変はらぬ香

紫陽花の毬のせり出す寺の奥 日野 渡辺八枝子

黒南風の空カタカタと卒塔婆鳴る

熱帯魚愛づるや齒科の待合室 横浜 大駒泰子

公園に小さいテント子供の日 横浜 大駒泰子

大沼の山菜届く夏来る

赤い薔薇白い薔薇這ふ家畳む

時の日や光で動く腕時計 岡 元枝

真つ直ぐに庭横切るや赤棟蛇

草の先蠟螂の子の風に飛ぶ

木苺や参る人滅る堂古りて 横浜 岡田幸吉

村は寝たか明るく暗く螢の火

三極や藪の深みに黄の花を

木下闇虫追ふ少年駆け抜けけり 奥野 周光

紫陽花を好みし母の忌日なり

在りし日の母と眺めし梨の花

矢狭間より覗く五月の槍ヶ岳 加藤 和子

落葉松の新芽に雨のやはらかき

紫の千代萩咲く母の日に

夏草の蓋ひし堰に水幽か 坂本 具子

里山の細き水路や栗の花

窓越の蓮華躑躅や山の朝

銭湯へ廃材運び夏来る 鈴木 律子

道場に朝練の音麦の秋

高きより定家葛の香る風 富田 要

遠回りする春宵の家路かな

畦塗りの鍬の下より草ひとつ

塀を越え高さを競ふ松の芯

春行くや棚に句集の『聴診器』 富田 要

描きかけの紫陽花画架に逝かれけり

マンドリンの音色は今も暮の春

梅雨間近ブロック登る団子虫

横浜 富田 要

鏡台の映す紫陽花今朝の色

四枚の蓆を地に置き柿の花

校庭に球音響く花の昼

長野 高朋

山林を画する白や花辛夷

名利の森もろともに霞みけり

豊 美佐子

燕の子監視カメラの上の巢に

二年目の自粛新茶で過ぎけり

青嵐買物籠を抱へ込む

川崎 横山ユキ子

公園の大き切株青葉寒

あぢさゐの毬の大きな札所寺

遣句集を夏の木陰に読み返す

鎌倉 佐藤千晴

大海原貴婦人の如ヨットおく

軽鴨の子は続けて楽し逆上り

風のなく開き切つたる芍薬よ

茅ヶ崎 久保田富士子

鳥の声櫟青葉のふところに

浜の露地古井戸脇に立浪草

掛袋つつく鴉や枇杷熟るる

師を思ふ転がる枇杷にカラス居て 大和 中谷由郁

片付いた部屋を過ぎゆく若葉風

思ひ出の腕輪を捨つる白雨かな

薰風やマスク外せば子の顔に

伊勢原 長嶋和子

夏燕島に初めて診療所

白のみを踏んで横断歩道夏

泥の香を搔ぎ立て進む代掻機

本島 廣

ひと気無きエンジン音の田植かな

苗影のけなげに並ぶ植田かな

軒菖蒲この家に男の子育ちをり

山本カツ子

優しさの香りレモンの花開く

柔らかき葉先を叩く走り梅雨

雪富士を黄金に染めて朝日影

秦野 秋山憲三

トマト挽ぎ丸齧りした遠き日よ

松蟬の気怠く鳴ける昼下り

白き富士植ゑしばかりの田に映る

松川 古谷悠紀子

初夏や端山は白き花ばかり

一番茶刈りて静けさ戻りけり

澄み切つて甲斐駒映す代田かな

甲府 江口嘉郎

菖蒲湯や菖蒲丸めて膝を撫づ

若葉風木陰で乳を含ませて

薰風や旅の雑誌へ貼る付箋

静岡

大石弘子

新緑の山で分け合ふ塩むすび

バス停に子燕の声届きけり

黒南風や舳先軋めく船溜

杉澤 修

懐に蜘蛛の囲抱く蘇鉄かな

鉄路跡草刈衆に風和む

炎昼やビル解体の土煙

杉山紀美子

階へ木洩れ日淡き夏落葉

測量士青田の風によろめけり

筍の出づるや仁王の裾どころ

高橋 一夫

頂やベンチの下の梅雨茸

水遊びホースで応ずる女の子

畦川へ蝶の舞ひたる真昼かな

田中秀幸

船底の壺を抜け出す真蛸かな

牡丹の山門出づる僧二人

鯉幟湖の風得て膨らめり

筑地裕子

真つ白な母の遺せし海芋咲く

炊きたての赤飯並ぶ端午の日

卯の花に覆はれるたる地藏尊

内藤允昭

夏籠り三和土に並ぶ草鞋かな

憲法記念日鑿跡深き防空壕

あめんぼう静かに水輪広がりて

静岡

永田公香

一輪の咲いて鉄せん濃むらさき

バス停に子つばめの声背なにして

水白く脹らみ滝の落ちにけり

長谷川秀子

くれなるの金魚まどろむ水草に

長雨や玻璃戸をたたく火取虫

卵塔に苔の歳月樹下涼し

福本 愛

人の息触るるにこぼれ沙羅の花

梅雨晴間オリブの葉のしろがねに

濃あぢさゐ待合室の欠形

矢野喜久江

安曇野のニセアカシアの広がりぬ

くちなしの花の下なるドッグラン

森英恵のハンカチくれし父のこと

焼津

小梁洋子

戦艦大和往きし海より夏来たる

初夏や紅茶におとす金平糖

アルプスの風呑み込んで鯉幟

川根寺町

鈴木裕一

新茶買ふ仲買の手のシャンシャンと

だみ声の混じる市場の初摘み茶

梅雨に入る九州遠く近きかな

津

瀬野喜代子

稜線に日の落ち夕焼はじまりぬ

籠りゐて逝きしを知らず水中花

遠尾根に雪の残りて梨の花

金沢

白村喜久代

更衣母の立居のなつかしき

師を訪へば梔子の香に迎へられ

連れ立ちてセーラー服や更衣

青嵐揺るる草木の中に立ち

生き生きと花びら広げ白牡丹

親燕つぶやくやうに鳴きゆけり

夕べの雨水路満たして蝌蚪泳ぐ

カーネーション妣の遺影のはにかみて

一人立ち一人かがめる踊子草

俎板へ水すべらせて蕨切る

夫さきに送りし安堵桐の花

一瀑のしぶき七色吹き上がる

山椒魚すべる水底影早し

掌に掬ふ夏越の水や比咩の宮

みちのくや小窓に飾る春紫苑

和菓子屋の墨書新たや柏餅

嫁坂に雀蹴散らすさくらしべ

白山吹隣る独り居逝きませり

金沢

廣田宏美

弔ひへ山路彼方此方懸り藤

芍薬を一輪挿しに夫忌日

風をよみ日をよみ熟るる麦畑

松田好子

富貴草匂ふ乙女の肌に似て

二胡響く堂はオアシス初夏の夜

コロナ禍の幼の入院牡丹の芽

宮崎恵美

春昼やをさなと二人折紙す

一回だけかぶりし兜飾りたり

桐の花咲く道いつもひとりなり

谷内瑞江

山の色変はりつつ夏すぐそこに

帯残し苺食べゆく獣かな

花の苗植ゑたる夜の小糠雨

白山

朝倉みゆき

夏シャツへ集団接種の手をとほす

豌豆の花の紫揺れ揺れて

天窓の星の輝き武具飾る

鶴尾正江

溪流の辺り点点花わさび

乱鶯のしきりに鳴けり峡の朝

すり足に鬼女のうなづく壬生念仏

敦賀

大田ふじ枝

加茂まつり牛車社頭に並びけり

縞馬の流るる縞や夏兆す

しろがねの水脈曳く汽船夏つばめ

葉桜や陶師の撫づる登り窯

走り根に玉虫拾ふ法隆寺

皮をむく両手に露のあく残り

裏年の筍の味噛みしむる

機械化の田植は一人結の里

旅の荷に風待月の牧歌集

跳ぬる魚抱きて水辺の青き蘆

燭高く灯せる僧の夏袴

花過ぎて八十路となりて老い迫る

石垣の隙間に可憐なすみれ草

鯉群れて水面が光る暮の春

熱砂ふみ弓士の射貫く扇の的

田の靴を脱ぐや百足虫のとび出せり

草むしり野に一にちの身をあづけ

飛騨の国師の句碑訪はむ夏至の頃

新茶汲む俳句字典に葉差し

凧の海潮目に燕見え隠れ

教賀 川口和代

田嶋豊年

中川雅月

中村秀一

山本一枝

徳島 林 早苗

取り取りの風鈴絵付始まりぬ

苔纏ふ八百年の櫓かな

縁結ぶ出雲大社の朝涼し

廃校に夏うぐひすの鳴き止まず

窓磨きカーテン洗ふけふ立夏

夕餉中枕に飛び込む火取虫

国分寺の心礎に溜まる五月雨

小松島 岡田あゆみ

目鼻なき夜泣き地蔵や雨燕

大鵠の川面を走る慌てやう

溶接の火花降る船夕薄暑

田上幸子

アルバムの恩師の若し青葉の夜

田を潤し螢はぐくむ瀬音かな

母の日の花束のひと花屋出づ

福岡 相本和子

とれたての蚕豆とどく雨の朝

額の花白きがゆれて雨もよひ

梅雨晴を縫ひきて定期検診へ

石原好宏

将棋指し扇でリズム長考す

筍流し父逝きてはや五十年

古里の棕あめ色祖母の顔

園田清子

十葉に悪戦苦闘の管理人

二年目の我慢の季節夏来る
湖にせり出すテラス青葉風 福岡 鶴田輝代

沢音や樹林に楚々と山あぢさゐ
百選の碑文を打つて瀧しぶき

日盛りの電線に来るかち鳥 那珂川 高山ひさ子

ひと休みまたひと休み草むしる

抜歯して忘れて来たる白日傘

一面に散り敷きつめて花みかん 長崎 下見直哉

遮らるるBS電波樹の茂り

野生枇杷鳥の突きし跡に蟻

木洩れ日の一筋もなし山繁る 西海 山下敦子

木耳のくちやくちや生ゆるに腰をかけ

南天の花こぼしつづ駆け行く児

雨あがり日傘にかへて出直せり 札幌 船橋明美

コロナの禍使ひ切れない日焼け止め

つちふるや昔運河の水清し 八代洋子

地平まで続く木道実はまなす

水をかけ夫は定植トマト苗 方賀 稲川清子

田植終へ予防接種のボランティア

神宮の森の四阿菖蒲園 新座 多田英治

リハビリに闊歩の兆し梅雨晴間
行き合ひの譲り譲られ梅雨の路地 柏 村田由美子

朝日出で夕日に沈む薔薇の家

こぼれ藤諸行無常の話かな 東京 大場八朗

春光をまといて園児はねまはる

猫の恋闇夜に物の落つる音 齊藤孝夫

湯舟無き旅籠本陣梅雨夕焼

梅雨空の雲に串ざすスカイツリー 前川 昇

曇り空枇杷の実光る散歩道

風も緑も光つて過ぎぬ昭和の日 宮崎正義

泰山木開き始めの可憐さよ

人氣なく広き境内青嵐 青梅 横井一美

梅雨晴間車内に忘れし傘二つ

若夏や湖守る友のメール受く 松本 藤森利子

通し鴨古郷久し知人無し

蛇の衣風のそよぎに骨鳴らす 姫路 稲田いさむ

庭に蝶信ずる義手の手のぬくみ

万象作品の佳句

小林 愛子

梅雨の路地無音で停まる救急車 桑原優美子

梅雨は、大体六月十日前後から一か月間雨が降り続く期間。微の発生や豪雨があったり、更に今年はコロナの自粛要請が加わり人々の閉塞感も頂点に達した。掲句の「梅雨の路地」がよい、生活の肌触りが感じられる。無音で止まる救急車で底知れぬ不安に駆られるのである。作者は東京の人。

葉桜をゆらす風あり花守忌 高野 松風

花守忌とは志城柏氏の命日、本名目崎徳衛（1929〜2000）。志城先生は新潟県生まれで聖心女子大教授、国文学研究者で俳人、「風」に在籍して自らも「花守」を主宰された。「風」には「花守」の会員も大勢在籍。句は「葉桜をゆらす風」に先生への追慕の念をつのらせている。花守忌と葉桜との関わり合いが優しく伝わる。作者は新潟の人。

噴水の高さがへて崩れけり 小坂橋泰山

この噴水は公園、庭園などに見られるものである。水が大きく天を突上げるのは壮観で、前後の見境もなく落ちてくるのは涼味満点。その落ちてくる様子を句は「高さがへて

崩れけり」と。誠に言い得て妙である。作者は横浜の人。

月食や赤の余韻の五月闇 北浦 詩子

先日皆既月食があった。月が全部かくれても、周りは何となく色が滲んでいるように見えるもの。句は色の滲みを「赤の余韻」と言った。折からの五月闇で、それは一層神秘的で美しかったに違いない。作者は札幌の人。

田水張る大河の水をもらひたり 宮田千恵子

代掻きのあと、田は水を引くばかりである。この句の眼目は「大河の水」。私の先ず思い浮かべるのは筑後平野を潤す九州最大の河川で、筑紫次郎の呼び名のある筑後川である。

〈菜の花の遥かに黄なり筑後川 夏目漱石〉。農家にとって大河は精神的な拠り所と誇りであろう。作者は福岡の人。

天城嶺に薄雲走る春の海 本多ひとみ

薄雲のはしる天城山頂を遥かに仰ぐとき、眼の前に広がる春の海に心奪われているのである。ゆつたりとスケールの大きい句となった。また天城越えで有名な天城はここを舞台の文芸作品、俳句も多い。〈わさび田を締めぐりし水さらに落つ 細見綾子〉。作者は静岡の人。

庭に生ゆ木の芽の味の日に濃く 佐藤 幸示

庭に植えられてある山椒の木であろうか。春先香気の強い

若葉を見た時の喜びは特別である。棘を避けながら摘んで食材として使う、大きい葉を叩くのも楽しい。「日々に濃く」は春を惜しむ気持ちにも通じる。作者は新潟の人。

やうやうに枝を捉ふる鳥の子 三村紀子

鴉の繁殖期は春から夏にかけてで、孵化した後一か月くらいで巣立ちをする。「やうやうに」枝を掴んだおぼつかないようすが可愛らしい。鴉の子に関する季語は春に鴉の巣、夏は鴉の子、秋に別れ鴉とあり、とかく憎まれがちな鳥だが人間の生活に深く関わっているのがわかる。作者は東京の人。

でで虫を踏んでしまひし日の懺悔 木内マヤ

かたつぶりが雨の日に角を振る姿をよく見かける。たまたま踏んでしまい、懺悔は大げさだが足裏の記憶が忘れたい。何しろ童謡にまで唄われた愛される陸生の巻貝なのだ。(舞へ舞へ蝸牛、舞はぬものならば、馬の子や牛の子に蹴まさせてん、踏み破らせてん、真に愛しく舞うたらば、華の園まで遊ばせん、梁塵秘抄)。作者は石井の人。

砂浜に耽読の人 白日傘 菰原美穂子

夏日が続き浜辺は人で賑わっている。泳ぐ人、ピキニ姿で休む人、はしゃぐ子等。その中に混じってひたすら本を読むことに夢中な人。大勢の中において個に浸る贅沢な楽しみ？ 広げている白日傘が眩しい。作者は佐野の人。

日は落ちぬ線路の端に月見草 三木豊子

月見草はアメリカ大陸原産の帰化植物で夜間に白い花を開くが数は少ない。大型の黄色の花の待宵草が一般的に月見草と呼ばれている。宵待草ではない。文学と植物分類と合わないのは間々あること。日が落ちたあと、線路沿いに見る月見草に詩情がある。作者は横浜の人。

ト音記号ほどはねぢれぬ振花や 鈴木美根子

振花は芝地や草原に自生するが、歴としたラン科の多年草。らせん状のねじれた花が可愛らしく色々詠まれてきた。作者の連想はト音(G)記号へ飛び、そこまでは振じれていないよ！と遊んでいるのである。作者は佐倉の人。

以下三句組より

一番茶刈りて静けさ戻りけり 古谷悠紀子

待ちに待った一番茶刈りは元気で行われたであろう。茶摘み唄があればなおの事。「静けさ戻りけり」は作業が活気に満ちていた証しである。作者は松田の人。

とりあへずなにもなけれど冷奴 有泉正夫

一日三食作って食べるのは結構大変である。朝食、昼食、そしてもう夕食の時間。冷蔵庫に食材はあるが取りあえず冷奴を、ということになる。作者は佐倉の人。

「万象俳句会」会計担当を終えて

万象俳句会元会計担当 竹澤 竹里

二〇一六年度より足掛け六年に亘り万象俳句会の会計を担当いたしました。この間、至らないことも多々あったことかと存じますが、会員の皆様のご支援・ご協力を賜りまして恙なく対応することが出来ました。誠に有難うございました。主な業務は、万象俳句会の会費並びに万象基金の管理とその執行でした。また入会、退会、住所変更等の会員名簿の管理もいたしました。

① 一般会計(会費)の部

二〇一三年度から二〇一八年度までの六年間の決算は、「赤字」でした。二〇一九年度に、僅かですが、一、八二一円の「黒字」決算に転換することが出来ました。

② 特別会計(基金)の部

多くの方々から万象基金にご送金頂き、一般会計の赤字補填に有効に使わせて頂きました。基金のお陰で今日の万象俳句会が成り立って居ります。ご協力に感謝申し上げます。

会計担当より在任中に気づきました点をお知らせします。
・会費の振込に過不足、二重振込等が見受けられました。
・振込は、手数料も掛かることですので、半期毎でなく一年分として頂けますと幸いです。

・中途入会の方は、会計年度(四月から翌年三月)に合わせ振込頂けますと助かります。

・次年度分の会費は二月中に前納して頂けますと幸甚です。
・振込用紙は、毎年「万象」誌二月号に印刷所にて挿入のものか、郵便局備付のブランク用紙に必要事項ご記入頂くか、ATMをご利用下さい。

(口座番号は、00230101103581)

二〇二一年度より、主宰のお取り計らいによりまして、新担当者(松浦会計担当・塗木名簿担当)を二名体制にて対応させて頂くこととなりました。新担当者に對しまして倍旧のご支援・ご協力の程宜しくお願い申し上げます。

最後になりましたが、会員の皆様の健康長寿・健康第一のご健吟を願って居ります。

創刊二十周年記念万象俳句賞速報

二十周年記念万象俳句賞(令和三年度)は次の通り決定しました。

万象俳句賞 茶 摘 笠 藤原千代子

佳作 網走囚人道路 大内マキ子

佳作 水めぐる 林 陽子

特別賞 夏雲 雀 佐藤 雄二

夏の動物 今越みち子

北の花ばな 佐藤 哲

「万象」中央句会報

(六月例会に替えて通信句会) 38名

内海良太主宰選

五月晴今朝の三龜山の高さかな 上岡佳子
 万緑の光あふるる術後の眼 中村千久
 酒足して魚煮返す梅雨の入り 板本文代
 猪牙舟の留め置かれゐて杜若 下嶽孝一
 銅山の奥は青嶺や雲生るる 茂木弘子
 噴水の高さがへて崩れけり 小坂橋泰山
 日照雨過ぎ南天の花良くこぼれ 佐藤嘉洋
 弁天に黄なる落梅並べられ 大橋雅子
 ④先頭は宿の提灯ほたるがり 小坂橋泰山
 ほたるの鑑賞をウリにしている宿。夕食が終った20時ごろ
 宿の玄関に集合して下さい、とのこと。提灯を提げた番頭さ
 んの案内で螢の現場に案内された。屋号入りの提灯がいい。
 ④夏のれんブティックに置く船簞笥 田中道江
 洒落た婦人服、装身具などを売る店。何から何まで近代的
 な感覚が溢れているが意外なことに船簞笥が飾られてあつた。
 焦茶色の箱に黒い金具、刺し子の裃でもあればピッタリ。

江見悦子選

浮み来る鳶のまなじり大南風 長谷川信也

神木に額を合せり螢の夜 吉中愛子
 迷路めく百円シヨップ夕薄暑 名和政代
 鮎の宿皿をとりだす箱階段 小坂橋泰山
 五月闇遺跡の丘の月欠けて 柳澤宗正
 ④早乙女の足冷たきと言ふ日暮 阿部澄
 田植の一日を終えて足拵えを解き、足の冷たさに気付いた
 早乙女は、経験の浅いうら若い女性では。汚れを洗い落した
 足の白さが見える。リズムよく下五に続き、日暮で決めた。

板本文代選

業平忌川見しあとの神谷バー 内海良太
 教へ子の厚き封筒梅雨曇 砂地宏子
 噴水の高さがへて崩れけり 小坂橋泰山
 梅雨寒や片膝立ててもつ煮込み 大久保進
 遠雷や猫は爪研ぐ寺の松 加賀葉子
 ④廃田があれば廃村姫女苑 内海良太
 後継者がいなくなり、田畑が原野に帰っていく山村の風景
 を思つた。姫女苑は多年草の帰化植物。どこにでも生えてく
 る逞しさが、廃田・廃村を伝える。現代が実感させられる。

山本とく江選

万緑の光あふるる術後の眼 中村千久
 二年目の自肅新茶で過ごしけり 豊美佐子
 先頭は宿の提灯ほたるがり 小坂橋泰山
 噴水の高さがへて崩れけり 小坂橋泰山

湧き上る雲の勢や栗の花 島田和枝

⑦七七日終へし便りや新茶くむ 草間三香子
コロナ禍の昨今、葬儀さえ儘ならず遠くで、故人のご冥福をお祈りするしかありません。気がかりだった方の四十九日の法要が済んだと便り、一人新茶を味うう安堵感が伝わる。

中村千久選

早苗田に毛野の山影揺らめけり 増田幸子
家中を梅の香にして梅しごと 久保村淑子

青葙原より鯉釣りの竿長し 島野ひさ
銅山の奥は青嶺や雲生る 茂木弘子

鮎の宿皿をとりだす箱階段 小坂橋泰山
⑧先頭は宿の提灯ほたるがり 小坂橋泰山

螢狩の句というと、とかく闇が出てきたりするのだが掲句は辺りの暗さを一行の先頭に灯される「宿の提灯」で描いている。人工の提灯の明かりと闇に飛ぶ螢火の対照がおもしろい。

吉中愛子選

五月晴今朝の三龜山の高さかな 上岡佳子
森林を迷ふさ迷ふかたつむり 名和政代

重たげな雲動き出す栗の花 榎本文代
水滴々代田に水の音のなき 島田和枝

朝の雷ビル街の空朦朧と 江見悦子
⑨沖繩忌近し礎に名を彫ると 内田郁代

龜田やす子選

二年目の自肅新茶で過ぎしけり 豊美佐子
銅山の奥は青嶺や雲生る 茂木弘子
仁王像五指に力や梅雨に入る 増田幸子
路地裏に梶子こもる白き闇 中村千久

朝の雷ビル街の空朦朧と 江見悦子

⑩先頭は宿の提灯ほたるがり 小坂橋泰山
奥 太雅選

家中を梅の香にして梅しごと 久保村淑子
先頭は宿の提灯ほたるがり 小坂橋泰山

高らかにホルンの響き立夏かな 藤原善明
辣韭を漬けて午後より会計士 内海良太

七七日終へし便りや新茶くむ 草間三香子
⑪梅雨晴れや聖火ゆつくり走りだす 小池宗彦

柳澤宗正選
山手線一周乗車目借時 藤原善明

梅雨晴れや聖火ゆつくり走りだす 小池宗彦
薔薇園やマリアカラスもモンローも 上岡佳子

湯上がりやうす暗がりに月見草 龜田やす子
一言主に一言だけを形代に 内海良太

⑫二年目の自肅新茶で過ぎしけり 豊美佐子
島野ひさ選

仙人掌に十年越しの一夜花 奥太雅

鮎の宿皿をとりだす箱階段 小坂橋泰山
梅雨空の雲にとどくやスカイツリー 広瀬俊雄

真白なる螢袋に虫のかげ 内田郁代
トランペット少し外れて青葉風 大駒泰子
⑧二年目の自粛新茶で過ぎしけり 豊美佐子

▽中央句会 9月例会は休会（通信句会なし）

10月例会は通信句会 投句締切10月20日

▽同人句会 9月例会は通信句会 投句締切9月20日

10月例会は休会（通信句会なし）

新入会員のご紹介

百野 祚子（千葉）、 為永 香月枝（敦賀）

万象基金のご報告

（創刊二十周年記念基金を含む）

三澤 治子

五〇〇〇

匿名 七口

（令和3年7月15日～7月21日
・受付順・敬称略）
「万象」発展のため、大切に
使わせて頂きます。

万象俳句会

珈琲ぶれいく

16



今回は「俳句の命」とも言われる格助詞「に」「へ」「を」の使い方を勉強します。

三つとも場所に関わるものですが、「に」が限定された場所を示すのに対し、「へ」は移動する方向を示します。そして「を」は、ある動作が始まる、あるいは通り過ぎていく地点を示すということになります。

カッコの中に「に」「へ」「を」のいずれかを入れましょう。

海（ ） 出て木枯帰るところなし 山口 哲子
擬人化された木枯はすでに海上にあるのです。正解は「に」。

終戦間近の特攻隊のイメージとも言われる句です。

知床の海（ ） 流るる氷かな 今井 杏太郎
春先に流水が知床の海をゆつくりと移動している様子です。水塊は海に浮かび動いているのです。正解は「を」。

空（ ） ゆくーとかたまりの花吹雪 高野 素十
花吹雪がひとまとまりとなつて真つ青な空を吹かれてゆく景です。移動する花吹雪ですから、正解は「を」。

一本の竹空（ ） 立て崩れ築 今瀬 剛一
崩れ築の支柱となつた一本の太い竹が川の中に立ててあります。竹の先は空を指しています。正解は「へ」。

裏富士の月夜の空（ ） 黄金虫 飯田 龍太
「に」「へ」「を」のそれぞれを入れて違いを考えてみましょう。龍太は「を」を使って、大きな景を詠みました。

（参考文献・中岡毅雄著『NHK俳句 俳句文法心得帖』）

北 南 西 東

消 息 等

内海良太主宰の句、「くちら」7月号

「受贈俳誌美術館」に掲載

野遊びやここにも馬頭観世音 内海良太

主宰の句、「風港」7月号「受贈誌主

宰・代表 近詠」に掲載

露味噌に先のとがりし若狭著 内海良太

副主宰の十句、「俳句界」7月号に掲載

燕の子

質倉の窓折返し燕の子

蟬の羽化潤ふ夜気の迫りけり

家中に風の通りて穴子飯

籠り居も長しごきぶり減多打ち

水無月の雲湧く下や骨取め

墓守に螢袋は白ばかり

雨雲のいつしか合歡の花の上

目の合うて言葉待つ間の涼しさよ

吹かれ来し和紙の色なる子蟬螂

港のクレン麒麟のごとく見る晩夏

岡本敬子さんの「万象」4月号の一句

「初蝶」7月号の「誌々風信」で鑑賞

冬だけの農家が造る通学路

冬になると、北国は大陸シベリア高気圧が

張り出す。大量の水蒸気を含み雪雲になり、

日本海側には、大雪を降らせ、生活道路も

塞がれ身動きの出来ないことも有り得る。そ

の厄介な大雪を、その土地ならではの工夫で、

子供たちの通学路を造つてくれている。除雪

車は国道、県道などが優先になり、村の道は

農家の人達が力を合わせて造る。その助け合

い精神を称え、子供達を見守る暖かい眼差

しが浮かぶ。

「第35回静岡県俳句大会」(静岡県俳句

協会主催)で、岩崎武士さんが大賞受賞

静岡県俳句大賞(静岡県知事賞)

芹引くやひとすぢ濁る富士の水 岩崎武士

俳句作品募集のご案内

第25回毎日俳句大賞 一般の部

・投句数に制限なし

・専用の投句用紙、インターネット応募

サイトから(専用の投句用紙は発行所に

ご請求下さい)

・1句につき千円

インターネット応募の場合はペイパ

ルやクレジットカードで。

郵送の場合は郵便局の窓口備え付けの振替払込用紙で。

・締切 9月27日消印有効

・作品集希望の場合は、1冊1580円

を投句料に加えて送金のこと。

第19回「富士山を詠む」俳句賞

富士山にかかわるあらゆる分野の歳時

をテーマにした、四季折々を詠んだ未発

表の作品(有季定型)の募集。

・郵便はがき、応募専用はがき、WEB

から

・作品1句(一人1句に限る)

・郵便番号、住所、氏名(ふりがな)、年

齢、電話番号を楷書で記入

・一般の部、応募無料

・9月30日締切

・応募先 〒418-8601 富士宮市弓沢町150

番地 富士宮市教育委員会教育部文化課

「富士山を詠む」俳句賞担当宛

「万象」の皆さん、奮って参加致しましょう。

(報・江見悦子)

令和四年

万象作品

一月号

(句の表記は歴史的かなづかいで)

都または市・町・村名

がふなり

年齡

[illegible]

送り先
〒
939
|
0364

射水市南太閤山 13
+ 24 成瀬真紀子

新規会員を紹介します	
姓	号
郵便番号 〒	
住	所

投句者 姓号

.....

住所 〒

.....

.....

電話

あ と が き

▽この号がお手元に届く頃は、東京オリンピックが終了し、パラリンピックが始まっている頃かと考えています。開会式直前まで、様々な課題山積みのオリンピック。閉会式後の日本社会の状況が懸念されますが、「万象」では着々と毎年の企画が実施され、「創刊二十周年記念万象俳句賞」について、速報をお伝えすることが出来ました。

北海道の林陽子さんが1年間続けて下さった「同人作品評」が、今回で最終となります。作者の周辺にまで丁寧な読みを深め、筆者の素直な感想を交えた鑑賞は、暖かで率直なお人柄を偲ばせるものでした。毎回楽しく読ませて頂き、原稿のやり取りを通じて私も色々と勉強させてもらいました。有難うございました。次回からは東京の大林彬彦さんに執筆をお願いしています。（江見）

▽榎本文代さん（横浜）による「特別作品評」が最終回となりました。「風」の時代に修練を積んだ筆者からは、俳

句の読み方というものを教えていただくことの多い一年でした。お力添えに感謝申し上げます。十月号からは中條睦子さん（金沢）に担当いただきます。

（千久）
▽ワクチン接種が進んでも大勢の人が集まる催しへの参加は不安です。

「万象」二十周年記念全国俳句大会の中止はやむを得ないと思います。しばらくは「忍」の環境での句作りが続きます。

（茂）
▽早くも来年の「俳句カレンダー」をご案内する時期になりました。本誌44ページをご覧の上、句会ごとに纏めてお申し込み下さい。（規子）

▽9月。ペリー・コモの歌う「セブテンバー ソング」が好き。一方、子供達の歌う「秋の子」「まっかな秋」等も好き。思わず歌いたくなるいい季節。歌いませんか？（英俊）

▽九月号のテーマは犬。犬は人の心に寄り添ってくれる最高のパートナー。その出会いも別れも忘れられない存在であると感じました。（純）

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

一年分 一、〇〇〇円
半年分 六、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。郵便振替口座 00230・0・103581

万 象 俳 句 会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗 木 翠 雲

万 象 九 月 号

第二十卷 第六号
通巻 第三四号

令和三年九月一日 発行

主 宰 内 海 良 太
発行人 江 見 悦 子
編集人

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東一-三-16-603

万 象 発 行 所

☎〇三-六三三-四一五七九六

「万象」創刊二十周年記念

記念評論賞募集

作品 四百字詰原稿用紙二十枚（八千字）程度、未発表の作品に限る。

（メール添付での送付歓迎、A4判サイズ）

選者 内海良太、小林愛子、山田春生、福島せいぎ、江見悦子

応募資格 「万象」同人、会員に限る。

締切 令和三年九月二十日到着分までを有効とする。

宛先 〒168-0072 東京都杉並区高井戸東1-31-6 603 万象発行所

メールアドレス em-etsu@yb3.so-net.ne.jp

大会作品募集

作品 二句一組（二組以上歓迎）「万象」誌（七・八月号）巻末の綴込み用紙をご利用下さい。

住所・姓号・電話番号をお書きください。

投句料 一組千円（句稿に定額小為替を同封）※締切 八月末日（火）

投句先 〒422-8056 静岡市駿河区津島町13-11 藤原千代子 ☎070・1628・4607

「万象」創刊二十周年記念全国俳句大会実行委員会

大会委員長 内海良太
実行委員長 江見悦子